戸澤姑射
淺野馮霊 共譯

文學士　戸澤姑射　譯

沙翁全集

第壹卷

ハムレット

發兌
大日本圖書株式會社
明治三十八年新版

明治
38 9 11
內交

Marlin - Bacon

沙翁全集序

我邦近年の國運の進歩は日に月に新なれど、正に世界の大國を敵手として古今未曾有の大戰を交へつゝありながら、他面に於て沙翁翻譯の出版の如き純文學的事業を許すまでに綽々たる餘裕あらんとは、譯者自身といへども、豫期せざる所なりき。嗚呼現下に於ける我國力の增大と、わが國民の意氣の健豪を證明すべき後世の紀念物は、海に浮べる二十萬噸の堅艦よりも、陸に動ける百萬の貔貅よりも、或は却つて、かゝる種類の事業にはあらざる

か。余等は年來の宿志の今日漸く決行の運に會したるを喜ぶ前に、先づ隆々たる國運に向つて、多大の歡喜と抱負とを感ぜずんばあらず。

されど吾人は信ず、萬事につゐて現下の日本は尙ほ其發達の中途に在り、刮目すべき大飛躍は、今後に於て期すべきことを。軍事にまれ、政治にまれ、商工にまれ、學問にまれ、我日本は尙ほ幾多發達の餘地を有す。殊に純文學の方面に於て益々然るものあるを覺ゆ。これにつけても、吾人は想をエリザベス朝の前半に馳せ、その今日迄の明治時代と契合する點の多きに驚かずんばあらず。エリザベス

朝の前半は大體に於て準備時代といふべく、國內の不和の分子を除去し、襲ひ來れる外敵を擊破し、又銳意外國の學問文藝を輸入し、かくて前半期に於て概して第二流に墜ち居たる英國をして、其後半期に於て、優然として第一流の域に進み入らしめぬ。今日の我日本は確かに此準備時代に屬す。バルチック艦隊を迎へ擊たんとしつゝある今日の日本は、蓋し西班牙の無敵艦隊を前面に控へたりし當年の英國にはあらざるか。

兎にも角にもエリザ朝の文學が、其後半に入りて隆盛を極めたりしが如く、明治文學の盛期も今後十年、二十年

若くは三十年の後に來らむ。今日は、この後年の大飛躍の爲めに羽翼を作るべき時代也。わが軍人が、今や後の平和の爲めに、一身を犧牲に供して奮鬪しつゝあるを思はゞ、業に文筆に從ふものも亦献身的勇氣を振ひ起して、心血を一管の筆に濺がずして可ならむや。エリザ朝の後半に、沙翁の如き大劇詩家、スペンサーの如き大叙事詩家、ベーコンの如き大思索家を出したるを知るものは、其前半に於て、希臘羅馬の古典の翻譯を大成し、伊太利、佛蘭西、西班牙の文學を輸入し、後の作者の爲めに大準備をなしおきたる人々の勞苦を知らざるべからず。大羽翼成らずんは

大飛躍は望むべからず。片々たる梗槩、迂濶なる空論に由りて大文學は生れざる也。衒學は事に益なく、無責任は進歩の敵也。斷じて排斥せざるべからず。

余等固より淺學短才、最も困難なる大沙翁を、最も不自由なる邦語に譯して、何等の遺憾なからしめ得べしとは思はず。たゞ專心一意、急がず、怠らず、余等兩人の性情に適應せる作を分擔して、極力努力せば、希くは大過なくして、後の明治文學の爲めに、缺くべからざる大準備の一を成就することを得んか。今や其第一篇を出すに際し、聊か所思をのべて序となす。

明治三十八年五月下旬

戸澤姑射

淺野馮虚

沙翁評傳

この沙翁評傳は、近日、本社に於て發行すべき淺野和三郎著「英文學史」より採錄せるもの也。

ウィリアム・シェークスピーア William Shakespear の大名は全世界に藏き亘り其作れる三十餘篇の劇詩は、何れも古今に稀なる名作として萬口の齊しく稱ふる所なるが、たゞ其一生の經歷に至りては、頗る茫漠として明亮を缺く所多し。かばかり有名の人物にして、かばかり出所進退の不分明なるは其儔蓋し稀也。沙翁は一五六四年四月二四日を以てアヴォン河上のストラットフォードに生れぬ。父は獸皮手袋等を販賣せる一小賈にして、家計頗る不如意を告げければ、沙翁の少時の教育は、決して普通以上には行屆かざりしものゝ如く「羅典語の僅少なる智識と、希臘語の更に僅少なる智識とを有するに過ぎず」と、當時の作者の一人は嘲れり。

沙翁の經歴

されど沙翁の英語の智識の博大なるに至りては、古今獨歩といふべく、其使用したる文字の數は實に一萬五千に上れりといふ。通例大作家と崇められ、大學者と尊ばるゝ人にありても、用語の數一萬にのぼるは稀にして、多くは三四千の邊に止まるを常とす。然るに教育の比較的不完全なる沙翁が獨りかくも用語に豐富なるは、偶々かれの才力の非凡なりし事及び其後年の工夫鍛錬の絶大なりしことを見るに足るべし。沙翁がかのトマス・ルーシーなる土地の貴族の獵林に闖入して鹿を盗めるが、爲めに故郷をのがれ出でゝ龍動に走れりといへる傳說は眞僞何れとも判定を下し難きも、兎に角少年時代の沙翁が頗る不羈溷逢、やゝもすれば情熱に驅られて輕舉忘動に出でし事は、殆んど察するに難からず。現にその十八才の時、己より八才の姉なる一婦人と結婚したるが如き其一例也。さて沙翁が

龍動に出でたる年月は正確ならねど、一五八五年前後、即ち其二十二三才の頃の事なり。その時より數年間の行動は、全く明亮を缺きて一も證跡の徵すべきなきも、蓋し、マァロー、グリーン其他の戲曲作者の群に入り、或は俳優となり、或は脚本に筆を執りて、專ら舞臺上の秘訣をさぐり、以て後年の

その第一期

素地を作れるものと察せらる。沙翁が初めて手を加へし脚本は「タイタス・アンドロニカス」なれど、こは自作にあらずして、單に加筆せるのみ。眞の沙翁の處女作は「戀の無駄骨折」是也。之につゞきては「間違の喜劇」「ヴェロナの二貴人」あり。皆マァロー生時の作にかゝる。此時代の沙翁は、尙ほ無韻詩と韻語の中間に彷徨し、纖麗優美、專ら場面の華やかなるをつとめ、未だ深き感想の流激しき情熱の焰なく、後年の傑作に比すれば自から重みの足らざる觀あり。之につゞける數年の間には、又多く英國の史劇

をものし、一五九五年に出せる「ジョン王」にいたる迄、凡そ四篇を出せり。以上を沙翁の修業時代といふべく、之をその第一期となす。

その第二期　一五九六年沙翁が傑作の一なる「ヴェニスの商人」出て、この時を以て沙翁の第二期に入る。沙翁の技倆はこの篇に至りて遺憾なく發揮せられ、其の舞臺面の整齊にして間隙なき、其事件の發展の自然なる、其詩趣の局所々々に溢れたる、各人物の性格の描寫の天工を奪ひたる等、沙翁ならでは、企及し難き所のものたり。當時の沙翁は少壯活躍の元氣に富み、血沸き腕鳴りて、失敗の何物なるやを知らず、蹉跌の何物なるやを味はいざりし時代なれば、重もに筆を喜劇に染め、「悍婦ならし」「面白きウィンザアの女房達」「空さわぎ」等の純喜劇を出し、少しく後れては、やゝ哀情多き「御意のまゝ」さては詩趣の饒多なる「十二夜」等の傑作を出せり。是等の諸作は、喜劇として世界文壇に匹儔を見ず。滑稽の中に詩趣を藏し、笑の裡に涙をかくし、繊のあはれ、人情の機微備さに描き出されて、人の心に最も圓滿純良なる慰藉を與ふ。沙翁の一身にとりても、この時代が最も得意幸福の時代にして、渠は是等の諸作によりて財を剩し、名を揚げ、サウザムプトン伯、エセックス伯、ペムブローク侯など、當時有力者の眷遇を受け、又女王の愛顧をさへ蒙りぬ。されど現世の有爲轉變は、何人の場合に於てもかはることなく、沙翁の身は俄然逆境に沈淪するに至りぬ。渠の保護者の多くは皆失意の境に陷り、中にもエセックスの如きは、叛逆の汚名を負はされて斷頭臺の露と消え、沙翁自身も多少之れと聯關して、苦楚を嘗めたり。加之當時渠はさる情事に關して、親友の一人に欺かれたるものゝ如く、其邊の消息はかすかに渠が作れるソンネットの中に伺ふべし。斯く公私兩つながら

ら志を得ざりし結果は、其人生に對する觀念の變更となり、今迄とは正反對に、沙翁は人生の暗黑面に眼光を向け、以て其第三期に突入しぬ。

その第三期　今や沙翁は專ら人間の罪惡を描き、良心の呵責を描き、過失、大望、奢侈、驕慢の頭上に落下し勝ちなる運命の冷酷を描き、怨恨、嫉妬、虚僞、忘恩、貪慾其他あらゆる人心の狂瀾と人生の浮沉曲折とをば、洞察し盡し描破し盡したり。「マクベス」を見よ。最初は胸底に良心の痕跡をとゞめたりし人物の惡より惡に、次第に破滅の淵に陷り行きたるにあらずや。「ヲセロ」を見よ。君子的人物が惡魔の如き猾賊の掌裡に弄せられて盲進猪突その底止する所を知らざりしにあらずや。「シーザー」を見よ。ブルタスの德も過失を防ぐによしなく、シーザーの智も野心の爲めに盲しぬ。「ハムレット」を見よ。可憐なる美姫と薄倖なる王子とは、人生の悲慘を味はひ盡して、

最後に無情の風に散れり。實に沙翁の才力は、是等の諸篇が續出せる時に、其絶頂に達し、從つて英國劇壇はこの時を以て其絶頂に達したり。其狀宛かも富士の高峰が群山の起伏せる間に拔け出でゝ千秋の白雪に包まれつつ、玲瓏として若空に聳ゆるの趣あり。

その第四期　されど、晩年に近くに及びて沙翁は再び前日の心の平和を回復し、塵世の煩累と、時俗の毀譽褒貶の上に超脫して純然たる空想界の人物となり、一六〇九年の前後を以て、ストラットフォードの鄕里に歸臥しぬ。この時を以て其第四期となす。この期の作は、「シムベリン」「あらし」「冬物語」等にして、田園的詩趣に富み、優遊自適、天命を樂むの雅懷を伺ふべし。其最後の作は蓋し一六一二年に出せる「ヘンリー八世」にして、フレッチャーとの合作にかゝれるものゝ如し。これより沙翁は數年間全く沈默を守れ

る後、一六一六年四月二三日、五十三歳を以て他界の人となれり。

沙翁の劇詩目錄

以上の叙述は、沙翁が作れる劇詩全躰の名稱を揚げ盡さゞれば、左に述作の順序に從ひて其全躰を列記すべし。沙翁研究者にとりて必要なるは、述作の年代を大方心得ふべき事也。坊間見る所の沙翁集は、配列の順序に注意を拂はゞるが多く、晩年の作を卷首におき、中年の作を卷尾におくなど甚だ混雜せり。かくては沙翁が作風の變遷推移を知り難く、不利益甚だ多し。左記の表は、讀者がこの弊に陷るを防ぐに足るべし。但し、其年代の推側に出でたるもの多く、中には往々疑問に屬するものゝ存在するは遺憾也。

(一)	「タイタス・アンドロニカス」	Titus Andronicus. (一五八八—九〇年)
(二)	「顯理六世上篇」	King Henry VI. (1) (一五九〇〜一年)
(三)	「戀の無駄骨折」	Love's Labour Lost. (一五九〇年)
(四)	「間違の喜劇」	Comedy of Errors. (一五九一年)
(五)	「ヴェロナの二貴人」	Two Gentlemen of Verona. (一五九二—三年)
(六)	「顯理六世中篇」	Henry VI. (2) (一五九一—二年)
(七)	「顯理六世下篇」	Henry VI. (3)
(八)	「リチャルド三世」	Richard III. (一五九三年)
(九)	「夏の夜の夢」	Midsummer Night's Dream. (一五九三—四年)
(十)	「リチャルド二世」	Richard II. (一五九四年)
(十一)	「ジョン王」	King John. (一五九五年)
(十二)	「ヴェニスの商人」	Merchant of Venice. (一五九六年)
(十三)	「ロメオ、ヂュリエット」	Romeo and Juliet. ?(一五九一年又ハ一五九六—七年)
(十四)	「悍婦ならし」	Taming of the Shrew. (一五九七年)
(十五)	「顯理四世上篇」	Henry IV (1). (一五九七—八年)
(十六)	「顯理四世下篇」	Henry IV. (2)

(十七)「面白きウインザトの女房達」	Merry Wives of Windsor.	(一五九八年)
(十八)「から騒ぎ」	Much ado about Nothing.	(一五九八年)
(十九)「亨利五世」	Henry V.	(一五九八年)
(二十)「御意のまゝ」	As you like it.	(一五九九年)
(廿一)「十二夜」	Twelfth Night.	(一六〇〇—一年)
(廿二)「シーザー」	Julius Caesar.	(一六〇一年)
(廿三)「終よき事善し」	All's Well that ends Well.	(一六〇一—二年)
(廿四)「ハムレット」	Hamlet.	(一六〇二年)
(廿五)「まづくら返し」	Measure for Measure.	(一六〇三年)
(廿六)「トロイラスとクレシダ」	Troilus and Cressida.	?(一六〇三年)
(廿七)「オセロ」	Othello.	(一六〇四年)
(廿八)「リヤー王」	King Lear.	(一六〇五年)
(廿九)「マクベス」	Macbeth.	(一六〇六年)
(三十)「アントニーとクレオパトラ」	Antony and Cleopatra.	(一六〇七年)
(廿一)「アセンスのタイモン」	Timon of Athens.	(一六〇七—八年)
(廿二)「コリオレーナス」	Coriolanus.	(一六〇八年)
(廿三)「ペリクリーズ」	Pericles.	(一六〇八年)
(廿四)「シムベリン」	Cymbeline.	(一六〇九年)
(廿五)「あらし」	Tempest.	(一六一〇年)
(廿六)「冬物語」	Winter's Tale.	(一六一〇—一一年)
(廿七)「亨利八世」	Henry VIII.	(一六一二—三年)

是等沙翁の戯曲は大抵皆典據とせる原本あり、其原本と沙翁の作との比較對照は甚だ興味ある問題に屬すれど、爰に述ぶるの餘地なし、たゞ之に つきて注意すべき事あり、他なし沙翁が材料を求むる事の甚だしく自由自在なりし事是也、或は從前の作家の脚本を改作せるあり、或は新舊の物語、若くは傳說等を根據として脚色を施したるあり、必らずしも材料の新

奇を求めざりき。これ大に看過すべからざる點なり。蓋し沙翁は己が力量の絶大なるを自覺せり。故に渠は他の作者と異なる材料を搜索するの必要なかりし也。如何なる陳腐の物語といへども、一坦沙翁の手にかゝらんか、全然面目を一新して無二の傑作と化す。渠は文壇の那翁也。其大膽不敵の振舞は、人をして呆然として常に三舍を避けしむ。但しかくの如きは、非凡の天才にして初めて行ふべきのみ。普通の作者にして若しこの擧に出でんか、模倣者として笑はれ、剽竊者として罵らるゝに過ぎざらんのみ。

沙翁の偉大

沙翁は世界の沙翁也。世界第一流の詩人と伍して優然として其第一位を占む。ホーマー、ダンデ、カルデロン、ゲーテ、モリエル等は誠に千歲稀に見る所の詩聖にして、沙翁と雖ども凡ての點に於て是等を凌駕し得たりとは言ひ難きものあるべし。されど全躰として觀察せんか、

其中の何人か、よく沙翁の圓滿なるに及ばむ。沙翁はコレリッジの所謂遍在的創造力 Omnipresent Creativeness. を具へたる大作者也。何事も其觀察の眼に入らざるなく、入りて記憶せられざるなく、記憶せられて幾多無盡藏の新人物、新事物となりて表出せられざるはなかりき。要するに沙翁の創造力は殆んと造化の域に迫れるものあり。其戲曲は眞に人生の縮圖也。悲劇の痛烈と共に喜劇の輕快を併せ有し、其中に描かれたる人物は個々面目を異にし、生氣躍然として血あり肉あり、其胸に手を當てゝ其皷動をきくの感あり、讀者が沙翁を繙きて相親めるる人物は容易に胸底を去らざる事實際の知人朋友の面影の容易に去らざるが如し。五度三度浮世の巷にすれ違ひたる人物の如きは忽ち忘れ得べきもの多し。沙翁の描ける人物は往々之に優る。其驅使せる措辭の縱横なるは、又よく之に協ひ、崇重、輕妙、通

俗高雅物として可ならざるなし。而して一見不用意の片言隻語の裡に、宇内の大哲理を潜ましめ、渾然として斧鑿の痕をとゞめざる大手腕は殊に及ぶべからざる所にして、平凡の讀者は之れを知らず、獨り物語の面白きをめで、深慮ある讀者は之をよみて益々その深遠奥妙なるに驚く。故を以て沙翁の大は、其當時の人士には充分了解さるゝに至らず單に「柔和なる沙翁」として愛せられたるのみ。十七世紀の末ドライデンの出でゝ、之を説くに及びて英人は漸く其眞價の幾分を認め、十八世紀博士ジョンソンの評價出るに及びて益々其偉大なるを知れり。されど尚ほ幾分か漠然たるを免れざりき。眞に明亮に眼底に映ずるに至りしは、十九世紀の初コレリッジ、ハヅリットの鋭犀なる批評眼の賜にして、爰に至りて、峰頭を包める雲霧は盡く掃蕩せられたり。十七世紀の初期に死せる沙翁の眞價が、十九

世紀の初期に至りて初めて了解せられたりとの一事は、以て沙翁の偉大なる事の一證となすべし。渠は二世紀間其時代に先んじたる也。

(研究書目)

(一)刊本——沙翁刊本は其種類數百にのぼり、一々擧ぐべくもあらず。其中に就き、出色の評を博せるもの數種を擧げむ。

(a) *The Glove Edition*, edited by Clark and Wright, 1 vol. (Macmillan.)其價廉にして正確、標準本として愛用せらる。

(b) *The Temple Shakespeare*, edited by Golancy, 40 vols. (Dent.)は可憐なる小册子の集合也。

(c) *The Eversley Shakespeare*, edited by Herford, 10 vols. (Macmillan.)

(d) *The Cambridge Shakespeare*, edited by Wright, 9 vols. (Macmillan.)

(e) *Henry Irving Shakespeare*, 8 vols. (Blackie.)の挿繪は特に巧妙也。舞臺の上の注意も行屆けり。

(f) *New Variorum Edition of Shakespeare*, edited by Furness (Lippincott. 及び Kegan Paul.)は專門

的に沙翁を研究する人々に取りて不可缺の大出版也。其中に包有されたるは「ロメオとジュリエット」「マクベス」「ハムレット」「リヤ王」「チモロ」「ヴニスの商人」「御恙のまゝ」「おらし」「夏の夜の夢」「冬物語」「空さわぎ」「十二夜」「走也」一冊各々時價九圓。

(二)評傳——これ又汗牛充棟今日に於ても益々增加しつゝあり。其選擇に向つては大に注意する必要す。先つ沙翁評論中の双璧と稱せらるゝは、

(a) *Characters of Shakespeare's Plays*, by Hazlitt (Bohn's Library).

(b) *Lecture and Notes on the Plays of Shakespeare*, by Coleridge (Bohn's Library) 是也。これは何人も精讀する必要す。其他拔群の好著と稱せらるゝは次ぎの諸書也。

(c) *Shakespeare, his Mind and Art*, by Dowden (Paul).

(d) *Introduction to Shakespeare*, by Dowden (Blackie).

(e) *Shakespeare, his Life, Art and Character*, by Hudson (Ginn).

(f) *Shakespeare's Heroines*, by Mrs. Jameson (Bohn's Library).

(g) *Lif of Shakespeare*, by Sidney Lee (Smith).

(h) *Shakespeare as a Dramatic Artist*, by Moulton (Clarendon).

(i) *Study of Shakespease*, by Swimburne (Chatto).

(三)語彙及文語學上の參考書——にては

(a) *Shakespeare's Lexicon*, by Schmidt, 2 vols.(Williams.) は沙翁研究者に缺べからざる字典也。又沙翁の文法を見るには

(b) *Spakespearian Grammer*, by Abbot (Macmillan). 最も貴重也。

(四)註釋書——これ又頗る多くして選擇に苦む。

(a) *Shakespeare's Plays*, edited by Deighton, 22 vols. (Macmillan). 其注釋丁寧にして最も初學者の便とする所也。

(b) *Shakespeare's Plays*, edited by Hunter, 35 vols. (Longman.)

(c) *The Pitt Press Shakespeare for Schools*, edited by Verity (Cambridge University Press).

(d) *Select Plays of Shakespeare*, edited by Clark and Wright (Clarendon).

(e) *The School Edition of Shakespeare*, edited by Hudson, 23 vols. (Ginn).

THE
Tragicall Historie of
HAMLET,
Prince of Denmarke.

By William Shakespeare.

Newly imprinted and enlarged to almost as much againeas it was, according to the true and perfect Coppie.

AT LONDON,
Printed by I. R. for N. L. and are to be sold at his shoppe vnder Saint Dunstons Church in Fleetstreet. 1605.

一六〇四年出版第二クヲート版「ハムレット」の表紙

（解題參照）

「ハムレット」序

譯者嘗て、故小泉八雲先生の講筵に列なりし時、先生諸生に勸めて曰く、汝が日常の言語を以て質朴に沙翁を飜譯せよと、其意蓋し沙翁の劇は其內容と思想とのみを以てするも尙ほ文壇の至寶と爲すに足るべく、又かゝる深遠なる內容思想を表現せむと力むる中には、不知不識我が國語の鍛煉、修辭文法の發達等を促すに至らむを豫期せられしなり、譯者沙翁譯に志ぜしも實に先生の此言に基きしなり

蓋し泰西の文學を我國語に飜譯せむとするは、油畫を日本畫に依て摸寫せむとするが如し、其畫題と畫題が表す所の意味とは之を移すを得べきも、畫の形式に依て生ずる一種の美に至りては如何ともし難きが如し、若

し其摸寫畫にして形式上の美を有したらば、そは摸寫したる畫工が特有の形式に伴ふ美にして、原作の形式美にはあらざるべし

殊に沙翁が或は奔放、或は典雅、縱横自在なる韻文を平板なる我が散文を以て飜譯するに於ては、翁が形式より生ずる美を傳ふること能はざるは、殆んど自明の理なりといふべし、若し其內容と思想とを忠實に移植することを得ば、譯者は十分に滿足せざる可らず、然れども其內容思想と雖も、之を十分に發揮し、讀者の胸中に有效なる印象を與ふるには、原作に存するが如き形式上の美と力とを有せざる可らず、かく考へ來れば文學の飜譯なるものゝ價値は甚だしく減少せざるを得ざるやうなれど、飜譯者の力むべきは即ち茲にあり、苦みも茲にあり、されど樂みも亦茲にあり、失敗も茲に在り、成效も亦こゝに在り

「ハムレット」は沙翁が作中の至難なるものなり、讀むに難く、解するに難く、評するに難く、味ふに難し、譯者の如きも、果して能く讀み能く解し能く味ひ得たるや否やといへる疑問に對しては、赧然たらざるを得ざるなり、まして かゝる至難なる作を、平凡なる文字に飜譯するに至りたる其大膽さを咎め給ふ人あらば、譯者はたゞ頭を低れて答ふるの辭もなかるべきなり

然れども、沙翁劇の如きは早晩我が文壇にも其譯書なかる可らざるものなり、少くとも傑作と稱せらるゝ數種の譯書は是非とも欠く可らざるものならむ、而してかゝる大作の譯書は到底第一回の譯を以て滿足すべき程の成效を期し得べきものならずとせば、不完全ながらも譯者か今第一回の譯を試みたるは、強ち突飛の沙汰にもあらざらむか、譯者は不完全な

る譯に憤激して、より多く完全なる第二回乃至第三回第四回の譯書の我文壇に現れ出でむとを望むや切なる者なり

明治三十八年五月

「ハムレット」の譯者識

「ハムレット」解題

「ハムレット」の初めて梓に上せられたるは、千六百〇三年にして、所謂第一クオート版是なり、翌千六百〇四年に、第二クオート版出つ、然るに此兩版の間には、大なる相違あり、先づ實質に於て、前者は後者よりも、千七百乃至千八百行不足せり、又人名及び場面の順序等にも多少の相違あり、此等の點に就ては、古來沙翁通の間に種々の說あれども、管々しければ謂はざるべし、たゞ第二版は第一版よりも、總ての點に於て完備せるが故に、後人之を標準となし、之に千六百二十三年に出でたる、沙翁全集の第一版、所謂第一フォリヲ版中の「ハムレット」を參酌校訂したるが、現今傳れる脚本なり、然れどもクオート版もフォリヲ版も印刷校訂共に粗漏にして、魯魚の誤

り甚だ多く、從て後に續々出てたる飜刻本も、校訂者の異なる毎に、多少の相違あるを免れず

但し此作脱稿の年月に關しては、確説なきに似たれど、要するに沙翁が、四十才に垂んとしたる頃の作なるは疑を容れず、ダウデン氏の説に依れば、沙翁は久しき以前より、悲劇の述作に志を有せしが、己が思想手腕共に未だしきを知り、容易に筆を染めず、比較的容易なる嬉劇及び史劇に腕を練ると十年餘、修養時代既に去り、大縱横大自在の雄飛時代漸く來り、己が空想を信じ手腕を頼み、少しも己れを危むの念なきに至り、初めて悠々自若の態度をもて物したるもの、即ち、ハムレット、なりと

此劇の資料の出處に就ては、十二世紀の末、若くは十三世紀の初頭、丁抹人サキッ、グラマチカスが拉典語にて物したる、丁抹野史中の一節に基けるや明なり、脚本中の大筋は、大抵野史の語る所と相一致せり、されば、ハムレット、劇は沙翁が空想に依てのみ脚色せられたるにあらず、沙翁は其他の脚本に於て常に然るが如く、此篇に於ても、能く歴史が語る所の事實を尊重したりしなり、然れども沙翁は、直接にグラマチカスの野史を讀みしにあらず、十六世紀の半頃、佛人某の著書中に、ハムレット物語をグラマチカスより譯出したるものあり、又此佛譯を更に英語に重譯したるものあり、沙翁は此二譯中の何れかに依りしならむといふ者もあれど、英譯の出てしは、千六百〇八年なれば、英譯は却て沙翁の劇の、好評嘖々たるに促されて出でしにはあらずやとも思はる、さて又一方には沙翁以前既にハムレットに關する劇あり、其作者はトーマス、キッドなりし事疑なき事實なるが如し、然れどもキッドのハムレット劇なる者は散逸して傳はらざるは

惜むべし、從て沙翁のハムレットはキッドのハムレットに基せしものなるや、又幾ばくの似寄と幾ばくの相違とを有するや等の趣味多き問題も、精確に解くことを得ざるは尙ほ〳〵惜むべし、莫遮沙翁が此劇を物するや、歷史上の事實を骨子となし、舊劇の精髓を取捨し、沙翁獨得の新性格を賦與し、新生命を吹込み以て此一大悲劇を完成するに至りたるや明けし」ゲーテ曰く、沙翁は此劇に於て、其器にあらざる、或は其任に堪へざる者をして、大事業を爲さしむるの結果を描寫せむとしたるものにて、全篇の結構皆な此趣旨より出づるが如し、譬へば草花を植うべき可憐の鉢に、樫の樹を植ゑたりとせむに、やがて根の張るに從て、鉢は自つと破碎せむが如しと、コレリッヂは曰く、沙翁は此劇に於て、外界の事物に對する注意と、內界に於ける考慮との權衡——即ち現實界と空想界との平衡を取るは、人

生の一緊要事たるを標示せむとしたるなりと、沙翁は果して此の如き目的を成就せむが爲めに此劇を草したりや否やは知る可らずと雖も、兎に角描出されたるハムレット其人の性格には、人をして此二大評家の言に首肯せしむる所大にあり、彼が爲さむと誓ひたる復讐の事業は、げにゲーテの言の如く、彼が爲めには柄になき大事業にて、之が爲めに煩悶し懊惱せるの狀、測々として讀者の心を動かすものあり、又彼はコレリッヂの云ふが如く常に現實を離れて空想に就き、一事一物に遭遇する每に、先づ必ず之を抽象し、分析し、あらゆる方面に亘りて觀察し、批評し、過去を省み、未來を慮り、研究に研究を重ね、考慮に考慮を重ねて、遂に之を實行するの機會を失ふに至る、此劇の始まりし時、ハムレットは既に三十才に達したるなり、常人ならば空想の夢を棄てゝ、現實の現に歸すべきの齡なれども、彼

は其頃まで先王の保護に由りて、ウヰッテンベルヒの大學に遊學を續け、哲學の研讃文藝の翫賞に心を凝し、未だ嘗て思を現實界に馳せたるとなく、理想界の羈(ほだし)は、一度も脱したるとならず、然るに一朝父王の死に會し、倉皇本國に歸來れば、葬送の「柩に侍したりし、履の土も未だ乾かざるに」、我が最も親愛せる母后は、人もこそあれ日來快しとせざりける叔父——「之を亡き父王に比ふれば日神アポロに牧神セイターを並べし如き」、叔父クラウヂアスと二度の契りを籠むるに逢ふ、是に於て理想界三十年の夢初めて破れ、怏々鬱々として樂まざるに當り、父亡靈の告に依りて、亡父の死は叔父の毒害なりし由を知り、且つ之が復讐の事を托せらるゝに至て、無限の哀傷となり無限の憤慨となり、復讐の目的を遂るの手段として狂者を粧ふと雖も、實は佯狂に依りて胸中の悶々を漏し、意味あるが如く意味なきが如き、零碎の奇語を發て、天を怨み世を怨み、人を罵り我を嘲りつゝも尚ほ復讐の事を以て任となし、「狂ひたる浮世の節を癒さむ」と志す、誠に優美なる、されど纖弱なる七寶燒の鉢物に、喬木の苗を植ゑたらむが如き觀あるにあらずや、彼は思索の人なり逡巡の人なり、實行の人にあらず、勇往の人にあらず、かゝる現實界の大問題に撞着し、それを解決せむとあせりながらも、尚ほ耳目の觸るゝ所を抽象し概念化するの習慣を改むること能はず、我が爲さむと欲する所、行はむと欲する所をさへ、眞に具體的に考ふること能はざるなり、故に復讐の機會は眼前に來りながらも屢ば之を逸し、却て偶然の出來事に依り、咄嗟の勇を起して絶望的に之を遂るを得たり、深謀遠慮は失敗に終り、輕燥短慮が成効を博すること却て多しとは彼が悟道の言なるが、是實に彼自身に適切に該當するの語といふべし、彼は思

索の人なり、從て彼が知力（インテレクト）は非常に發達し、事物の眞相を觀破すること勿論抽象的に甚だ敏捷、痛快なる諷刺、皮肉なる批評口を衝て出るを見る、彼は哲學者なりとの評、若くは此劇は哲學的の悲劇なりとの評は、惟ふに茲に胚胎せしならむ、然れども彼は哲學者の如くに冷靜なるにはあらず、智力が發達せると同樣に感情も至て鋭敏に、自ら情の奴隷たるを慨し、「智と情と程よく和合せる」の故を以て、ホレーシオを尊崇して惜かざる程なり、さて彼は斯の如き智力、斯の如き感情を有しながら、一面には一種奇なる危險なる意志を有するなり、そは物に激したる時、咄嗟の間、半ば無意無識の中に、恰も天啓に接したらむ者の如く、俄に決然として起ち、殆んど絶望的の行爲を爲すことにて、彼が平生の深思熟考とは大なる矛盾なり、例へば俳優の來訪に會うて忽然として叔父王が良心を試驗せむの計略を案出して實行したるが如き、又船中にて國書を書替へ國王が陰謀の裏をかきたるが如き、さては惟恨の後に潜めるポロニアスを、何の躊躇もなく只一刀に刺殺したるが如き是なり

ハムレットが此等の複雜せる性格は、簡短なる、左れど華美輕佻なるレーヤチス、果斷決行の勇ありて大膽に快活なる小フォーチンブラスと對照せられて、特に其顯著なるを覺ゆれど、彼がオフィリアに對する愛に至りては寧ろ其奇なるを覺ゆれど、上來述來りたる彼が性格と周圍の事情と、オフィリアの人となりとより推考すれば、寔に此の如くならざるを得ざりしならむ、さるにても不思議なる戀物語は是なるかな、二人の戀人の胸の底には、深く切なる戀を包みながらも、戀らしき科白、戀らしき仕草の陳べられ演ぜられたると一回もなく、我等平凡の讀者にはいかにも物足らぬ心

地歯痒き心地せらるゝ程ながら、反覆熟讀すれば何處とやら、淡白の間に一種の妙味もあるやうなり

此等に就ては古來學者批評家の間に、之を蒐むれば汗牛充棟も啻ならざる程の評論解説あれど、餘りに此等に精通すれば、却て脚本其者の理解に害ありて益なしと説く者あり、譯者も寧ろ此説に贊成する者の一人にて他人の評論に依りて理解せむと力むるよりは、先づ己が頭腦を頼り、直接に脚本其者に親めと勸むる者なり

「ハムレット」引

原書は主としてメシュエン社發兌、ダウデン氏校訂の「ハムレット」を採用したり、從て解説も同氏の説に從ひし所甚だ多し、然れども譯者は沙翁學者にあらず、諸家の註釋解説に對して、敢て定見を有するにあらねば、諸説紛々として確説なき章句の如きは、寧ろ飜譯するに都合の好不好を標準として取捨したり

譯者は原本中の文言は、漏れなく移植せむとの考にて、譯し得る限りは之を譯したれども、駄洒落地口等に屬する文句は大抵之を省略したり、尤も原文の文字を離れ、之を邦語の駄洒落地口に引直すことは、強ち不可能にあらざる可けれど、譯者はかゝる事に不得手の方なり、又よしや巧みに引

直すことを得たりとも、却て之が爲め原文の興趣を破ることあるを恐るゝ者なれば乍遺憾此擧に出たるなり、尤も中にはどんな形にも飜譯せねば、前後の連絡を保ち得ざる如き場合には、止むを得ず下手なりに譯したり、又此等の外に一語にして二義を兼る文字は、比較的重要なる方の意義のみを譯して、他の一方を棄てたる例もあり、之が爲め原文にては甚だ興味ある片言隻句の、平凡の言句となり了りたるものあるは譯者の甚だ遺憾とする所なり

譯者は可成原文を離れざるやうに力め華美ならむよりは寧ろ質素ならむとを欲したり、誇大敷衍するが如きは、尤も注意して避けたる所なり、譯者は初めて原文を讀まむとせらるゝ少年諸君の爲めに、幾分の手引草ともなれかしとの、老婆心をさへ有したるを自自す

本篇第一幕第二場より第四場迄は、先年坪内博士が飜譯せられたるものあるは、讀者諸君の熟知せらるゝ所ならむ、譯者は博士の該譯をいたく尊重するものなり、從て第一幕中の大部分（即ち第一場より第四場迄）に於ては、博士の譯出せられたる、語句を參考したるのみならず、中には其儘借用したるものなきにあらざるは、譯者の深く博士に感謝する所なり

「ハムレット」目次

第一幕

第一場　エルシノーア宮城前の見張場……四Ⅱ

第二場　宮城内の廣書院……一六

第三場　ポロニアス館の一室……三五

第四場　見張場……四四

第五場　見張場の續き……五二

第二幕

第一場　ポロニアス館の一室……六六

第二場　宮城内の一室……七五

第三幕

第一場　宮城内の一室……一一九
第二場　宮城内の書院……一三二
第三場　宮城内の一室……一六三
第四場　皇后の居室……一七〇

第四幕

第一場　宮城内の一室……一八六
第二場　宮城内の他の一室……一八九
第三場　宮城内の他の一室……一九二
第四場　丁抹の平野……一九九
第五場　エルシノーア宮城内の一室……二〇四

第六場　宮城内の他の一室……二一一
第七場　宮城内の他の一室……二二四

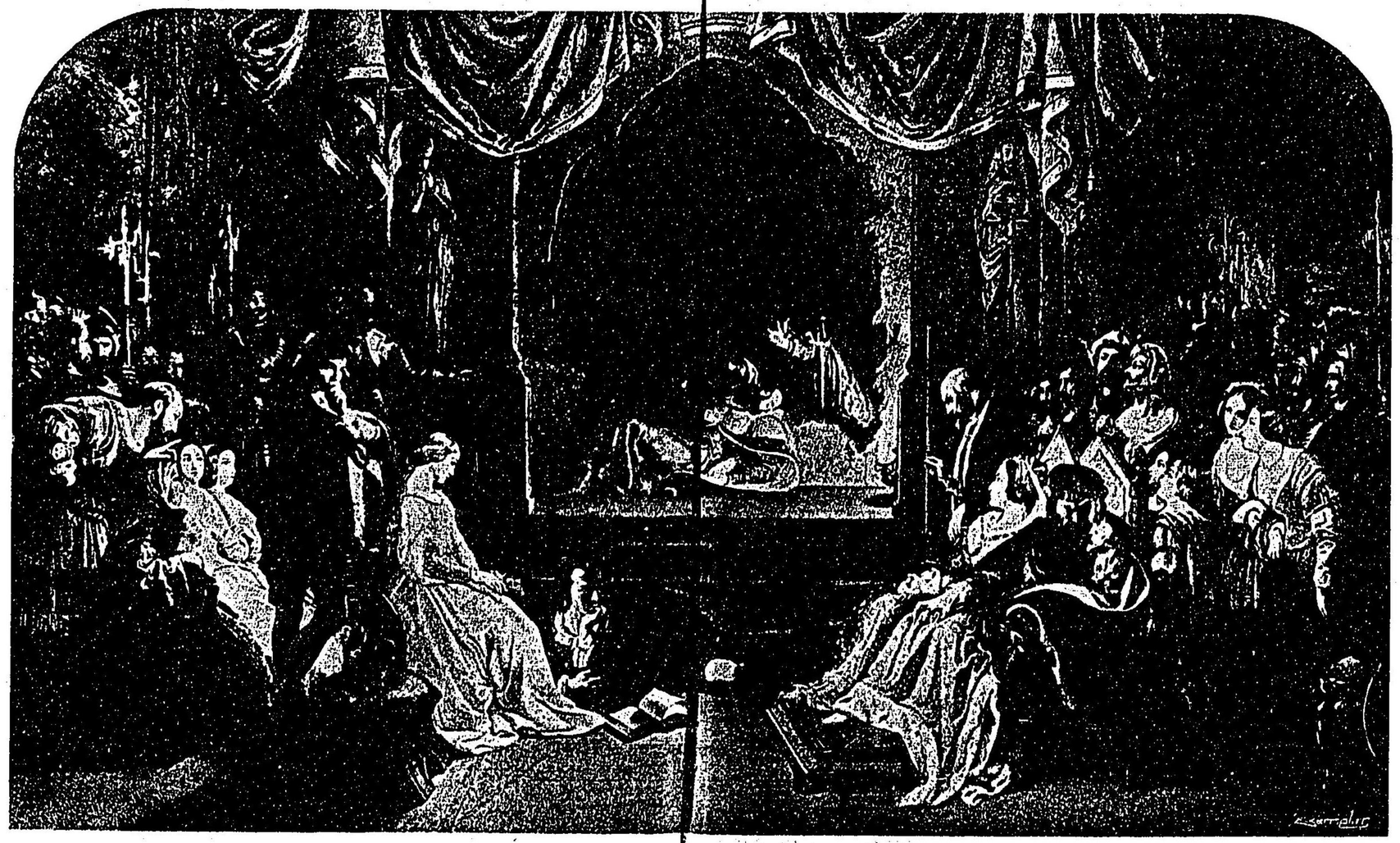
第五幕

第一場　墓所……二三九
第二場　宮城内の書院……二六二

戸澤姑射譯

ロメヲ、エンド、ヂュリエット

全一冊　續刊



「あれこそ王位を盗はしが爲め庭内に王を殺害したい所……」

（一五一頁參照）

丁抹國の皇子ハムレットの悲劇

登場人物

クロウヂアス(Claudius)	丁抹國王
ハムレット(Hamlet)	先王の子、現王の甥
フォーチンブラス(Fortinbras)	那威國の皇子
ホレーシオ(Horatio)	ハムレットが腹心の友
ポロニアス(Polonius)	侍從長
レーヤチズ(Laertes)	ポロニアスの子息
ヴルチマンド(Voltimand)	
コルチリアス(Cornelius)	

ロゼンクランツ(Rosencrants) 廷臣
ギルデンスタン(Guildentern) 廷臣
オスリック(Osric) 廷臣
某 廷臣
僧官 廷臣
マーセラス(Marcelus) 武官
ベルナルド(Bernardo) 仝
フランシスコ(Francisco) 兵士
レイナルド(Reynaldo) ポロニアス家來
隊長某
英國使節數名

俳優若干名
道化役二人 墓掘人
ガートルード(Gertrude) 丁抹國皇名
オフィリア(Ophelia) ポロニアスの女
其外公卿、官女、武官、兵士、使者及び從者大勢
ハムレットが父王の靈

場所
エルシノーア(Elsinore)

第一幕

第一場　エルシノーア　宮城前の見張場

フランシスコ(兵士)立番して居る、ベルナルド(士官)交替に入來る(時は真夜中頃)

ベルナルド　誰ぢや

フランシスコ　其訊問は此方より停れ、お名乗あれ

ベル　「國王萬歳」(定例の合言葉)

フラン　ベルナルド殿でムりましたか

ベル　いかにも

フラン　よう時を違へず御出下されました

ベル　今十二時の鐘を打ちしところ、イザ寢みやれフランシスコ

フラン　御交替有がたうムります、酷い寒さで心から弱り果てましたところ

ベル　別條もなかりしか

フラン　小鼠一つ騒ぎませぬ

ベル　さらば、寢みやれ、若し途にて身共が相番のホレーシオ殿、マーセラス殿に出遇うたなら、急ぎ參るやう申して呉りやれ(トフランシスコ行きかゝる)

フラン　どうやらけはひが致すやうぢや、ホー停れ、誰ぢや

ホレーシオ　御國を愛する

マーセラス　大君の臣民共

フランシス　さらば、安らかに夜を御過しなされ

マーセラス　オヽ、さらば、忠義者、交替に參たは誰ぢや

フランシス　ベルナルド殿でムります、さらば安らかに

とフランシスコ退場

ヤホレ　喃々、ベルナルド殿

ベル　さういふ卿は、ヤ、ホレーシオ殿でムるか

ホレ　ざつと其樣な者でムる

ベル　ようこそ御出下されたホレーシオ殿、マーセラス殿ようこそ

マーセ　何と今夜も又彼ものは現はれましたか

ベル　まだ何も現れませぬ

マーセ　ホレーシオ殿には、我等が二度迄も見し、彼の恐ろしの幻を、そは我等が忘想なりとて、いつかな信じ給はねば、今夜は通宵油斷なく、共に御番を務められよと、勸めて伴ひ來りしも、若し彼の妖怪又もや現れなば、一つには我等が眼の確かなるを證し、二つには其妖怪に物云騷て見させむ爲め（譯者曰く、ホレーシオは彼等の間に學者として知られる者、從て拉典語の知識あり、然るに拉典語は其頃妖怪鬼神に對して効用ある唯一の語と信ぜられたるより此語あり）

ホレ　愚かや左樣ものが現れるもので

ベル　先づ〳〵お控えなされ、我等が二夜さ見たるところを、最一度語りて、さしも手堅き御耳の關所を攻立て申さむ

ホレ　さらばかう下に居て、ベルナルド殿が物語を聽聞致さう

ベル　遂昨夜の事でムッたが、北極星の西に見ゆる、アレあの星が丁度あ

の邊りへ廻て來て、あのやうに煌めく頃、マーセラスと某と、たゞ二人にて居るところへ、折しも鳴るは一時の鐘——

と先王の亡靈現出る

マーセ　コレ靜かに、お止めなされ、ソレ其處へ又現れました

ベル　げに崩御ありし先王に、露違はぬ御姿にて

マーセ　ホレーシオ殿卿は學者、物云懸て御覽なされ

ベル　何と先王に似申した姿であらうが、よう御覽あれホレーシオ殿

ホレ　げに生寫し、あな不思議、あな恐ろし、思ひも亂るゝ斗りてムる

ベル　物云懸られむを待居る樣子

マーセ　問懸けられい、ホレーシオ殿

ホレ　そも〳〵汝は何者なれば、靜けき夜半を我物顏、故陛下がそのかみの氣高く勇ましかりし御姿を、妄りに裝ひ擬らうや、其譯語れ、イザ問かう

マーセ　ヤ、不興の面持

ベル　御覽あれ、靜々と出て行きます

ホレ　停れ、其譯語れ、イザ〳〵、其譯語れ

と亡靈消え失せる

マーセ　消え失せました、答へぬ決心と見えまする

ベル　さてホレーシオ殿、如何てムる、ハヽア色靑ざめて顫えてムる、これは妄想とばかりは申されますまい、御考はいかがてムる

ホレ　神も照覽あれ、我が二ッの目の正々しき證明なかりせば、いかでこれが信じられう

マーセ　よう先王に似申して居たらうが

ホレ　卿が卿に似たると同樣――あの鎧こそは故陛下が、野心深き那威王と、一騎打の其砌り、御召ありし其鎧、又彼の不興顏は、同じく故陛下が、波蘭人との談判破れ、憤怒の餘り氷上に、樅の中ながらの彼等をば、御討ちありし折に異ならず、げに不思議

マーセ　前にも二夜さ此樣に、時刻も丁度此深更、我等が見張れる傍を、さも威猛高に、靜々と過られましたし

ホレ　某とても、是ぞと申す取留めた考はなけれども、廣く物を案ずるに、是は何ぞ國家に凶事のある前兆

マーセ　さてそれにつけて承りたき事がムる、先づお下に居らせられい、そもいかなれば、かく我等臣民夜な〳〵殿重なる見張を致すぞ、いかなれば、かく日々に巨砲を鑄、又は外國より戰道具を購入るゝぞ、いかなれば船大工は、平日休日の差別もなく、痛ましき迄追使はるゝぞ、さては國內擧りて、かく夜を日に繼ての辛勞は、いかなる大事の迫れるやらむ、どなたぞ御承知あらば御聞かせ下され

ホレ　其儀は某承知致す、イヤ兎も角世間には、密々斯樣の噂がムる、今も今とて、其御姿を現し給ひし、故ハムレット陛下には、各〳〵知らるゝ通り、那威王フヲーチンブラスが自惚强き喬慢心を憎ませ給ひ、彼が望みの一騎打、勝負を試み給ひけるが、何がさて武勇絕倫と遠近に、其名も高き故陛下なれば、フヲーチンブラスは手もなく討死、然るに豫め契約あり、國法武士道にも照した上、彼王には生命と共に、所領の地を悉く賭となされ、又我王にも、之に相應しき賭をなされ、若し彼王勝負

に勝たれじなら、我が王の賠物は、彼が永久の所領に歸したりしを、同じ契約の面に依り、彼が領地は悉く、ハムレット陛下の御手に落ちました、然るに御聞あれ、彼が忘形見の小フヲーチンブラスは、生鍛なる血氣の勇に驅られ、此度那威の邊疆に、深く目論む所ありけむ、此處彼處に無頼の徒を糾合して養澁くは、我が要路の人には明白、武力を用ひ強迫し、亡父が失ひし件の領地を、取還さむの下心、我等が準備に忙がはしき、その大概は皆な是故、我等が夜毎の此警術、さては國内大繁忙大混雑の由來も、皆なこゝと推察致す

ベルナ　某も的切それと推察致す、されば、こそ、此戰爭の本末の、依てかゝれる先王に、かくも似寄りし幻が、物知らせ顔の甲冑姿で、見張の場にも現れたれ

ホレ　塵小なれども眼を惱ます、此事些事なれども、心の眼に入る塵に似たり、想ふ羅馬共和國全盛の砌り、大チュリアス殺害の少しき前の事なりしが、亡者は悉く憤墓を出で、經帷子の屍骸共、羅馬の街頭に喚き罵り、天上の日や星や、樣々の怪を現じ、チブチューンが領と聞く、青海原の潮の滿干を司る、月さへいまはと思はれて、黑闇々となり果しとか、それにも似たる椿事の前兆、運命の行先に立つ先拂ひ、廻て來む凶事の前觸と、我が四方の國人に情深き天地の御告げ——

と亡靈再び現出る

イヤ待て、御覽あれ、アレ又其處へ現れました、いかなる祟を受けうとまゝ、某彼を遮り留めむ——停れ、まぼろし、汝若し聲を發し、若くは詞をかはし得べくば云て見よ、某が名も損せず、汝に慰安を與へ得べき、

手だてあらば我に告よ、豫め知るならば、免れ得べき國家の運命を、汝若し知りてあらば、おゝ云ひて見よ、さては生前、不義の賓を地中に埋め置けば、亡魂此世に迷ふと聞く、汝若しさる事もあらば我に告げよ、ハテ停れ語れと申すに、お留めなされ、マーセラス殿

マーセ　戟にて打ちませうか

ホレ　停らずば、さうなされい

と雞の鳴聲する

ベル　ソレ其處に

ホレ　コレ此處に

と亡靈又消え失する

マーセ　イヤ消え失せました

かくもけだかき面影に、無益の暴行はなめげてムつた、打てばとて煙

のやうに手答もなければ、ほんにはかない惡戯と申すもの

ベル　雞が鳴た時、丁度物云ひたげの樣子てムつたが

ホレ　罪ある者が、豫て恐るゝ召喚受しもかくやらむ、俄に遽て惑ひし樣子、東雲誘う鷄が、あの高い鋭い聲て、日の神を呼び覺せば、その聲に促され、火の中水の中、又は地中空中を彷徨ひありく亡者共、急ぎ己が火宅に走ると聞きしが、げに虚言ならぬ證據を今見屆ました

マーセ　げに雞の聲にて消え失せました、人の申すに救世主降誕の祭も漸う近つく頃は、通宵曉告鳥の聲絶えず、亡者も彷徨ひ出るとなく、夜はたゞ清く安らけく、星の祟り變化の怪も小止して、巫女神なぎも神通力を失ふ程、たふとくありがたき時ぢやと申しまする

ホレ　某も其樣に承り、又半ばゝ信じまする、去りながら御覽あれ、紅扮裝

の朝日子は、アレ彼の東山の頂に、露踏分けて現れました、いざ此見張りも早や是まで、さていかゞてムる各には、我等が今夜見たる所を、ハムレット君に申上げうてはムらぬか、我等には口をつくめる亡靈なれども、君には屹度物云聯けむ、又此事言上は、君を思ふ誠よりも、臣たる務の上よりも、至當の事とは思されませぬか

マーセ　某もどうぞ左樣致したい願ひ、幸ひ某は、今朝皇子に對面の仕るべき、便宜の場所を存じて居ります

と一同退場

第二場　宮城内の廣書院

勇ましき喇叭の聲の中に、國王、皇后、ハムレット、ポロニアス（侍從長）、レーヤチス（侍從長の子息）、ヂルチマンド（延臣）、コルチリアス（仝上）、其外公卿侍從等著千名登場

國王　朕が兄王、故ハムレット陛下崩御ありて未だ幾ばくならず、されば我等が心はたゞ憂へ傷しみ、一國擧りて、悲みの同一額に顰み渡れるこそ、いと相應はしきやうなれど、理性の思案をもて人情の自然を和し、故陛下を悼むの念切なりとも、己が一身を忘る可らず、さてこそ朕は曩日の緣姉宮今日の皇后、此武勇國の嫡統の宮をば、悲みも混る喜びもて――片眼に笑み片眼に涙、葬式の挽歌は婚儀の歡樂と相交り、悲みは喜びと交も至りつゝ――朕が妃と致した次第、尤も此儀について、初めより卿等が知惠分別にはかり、卿等はそれにつき終始同意を寄せられしは、朕が感謝に堪へざる所、さて次に陳ぶべき儀は、各

も承知の通り、那威の太子フヲーチンブラス、朕を不肖の君と侮りて
や、又は兄王崩御の爲め、國内騒擾動亂すべしと思ひてか、乘ずべきの
機今にありとの夢心地に、先年彼が亡父より、正當の契約を履み、朕が
勇敢なる兄王に、讓り渡しゝ領土をば、還付なせよと、使者を立てゝの
五月蠅き請求、さて彼が申條は是丈なるが、今日此會合の席を以て、吾
るべき一條と申すは、右フヲーチンブラスが叔父なる那威王には、近
年健康勝れず兎角病床に臥しがちの身、姻皇子が此度の企圖にも、預
り知ることなきは明白、さはれ皇子が兵を募り隊を調ふるなど、皆な
彼が領國の中よりなれば、朕は茲に國書を那威王に贈り、今に於て此
不穏の行動を差留めさせむ心得なり、それに就きコルチリアス、幷に
ブルチマンドの兩卿には、使者として急ぎ那威王の許に赴き、右の國

書を呈せられよ、尤も彼王と商議すべき件に關し、卿等に授くる權限
は、これなる明細の書中に記しある、箇條を一歩も超ゆべからず、急ぎ
此使命を果して、愈よ忠精を抽んてられい

コルチリアス　其儀はもとより、如何やうの儀なりとも、御辭退は致さぬ心得でム
ります

國王　朕もそのやうに確信致す、堅固て參れ、さらば

とコルチリアス、ブルチマンド退場

さてレーヤチス殿、卿が陳述致したい儀とは何事ぢやな、願事がある
と申されたは何事ぢや、當然の申條にて、卿の願とあらば、聞捨には致
さぬ、パテ卿の乞ふ所、朕が承引ぬものがあらうや、丁抹の王位と卿が
父ポロニアスとの其交情は、頭腦と心手と口とが相應じ相扶るに異

ならず、願とは何ぞレイヤチス

レーヤ　陛下、御願と申すは、御聽許を得て、再び佛國へ參りたいとの儀でムります、陛下御即位の大禮に列らむとの微衷にて、わざ〳〵彼國より歸國致した次第でムりますが、今は其御事も濟みし上は、何をか包まむ、又もや某は佛國へ參りたき心願にムります、それで陛下の御仁慈深き御裁可を仰ぎまする

國王　して父の許容は既に得たるか、ポロニアス殿卿の意見は

ポロニアス　陛下、彼奴は頑き請願を繰返し、某が澁々なからの許可をもぎ取りました、それで某もとう〳〵彼奴が志願へ認可の印を捺しました次第、陛下にも何卒御聽許あるやう、某よりも願上まする

國王　さらば都合次第で出立致せ、レーヤチス、して逗留の時日は心のゆ

心ゆくやうに留學致すが宜しい――さて次に朕がみうちにして、又朕が子なるハムレット――

ハムレット（旁白）みうちは愚か養父去りながら、みうちともなし難き汝の人物

國王　卿にはまだ憂の雲が懸れる樣子、何とてあるぞ

ハムレット　イヤ陛下、日なたぼこりの、至て伸氣でムります

皇后　喃ハムレット、其黑裝束を脱ぎ棄て、ちとさえ〳〵しい眼を、陛下の御覽に入れるがよい、何時迄も俯きがちのその眼元で、地下の父君をお慕ひ申すはやめやいのう、生あれば死ある習ひ、此世より彼世に逝くは常と知らずや

ハムレット　母上、いかにも常でムります

皇后　さらばなど卿に限り、父を失ひしやうの樣子を致すぞ

ハム　「樣子」とな母上、イヤ樣子ではなうて事實でムります、それがしは「樣子」と申す事を存じませぬ、母上、小子の心をありのまゝに表しまするは、たゞに此黑い衣、其外有り來りの黑扮裝、强いて吐く溜息、眼中に溢るゝ涙の川、萎れ返つた作り顏、さては悲みを表す種々の、見榮形式でもムりませぬ、是等は擬やうと思へば擬らるゝもの故、實に「樣子」でムりませうが、小子の胸の中には、かゝる見榮ならぬものがムります、それに比ぶれば、これ等はげに表面ばかりのえせ哀傷

國王　イヤ、ハムレット、亡き父君を左樣に悼み慕はるゝとは、げに優しの氣質感じ入れど、思うても見よ、父君も一度は、その父君を失はれ、その失はれた父君も、その又父君を失はれしぞ、さてふり殘されし子たる身が、暫く愁傷に日を過すは、情義の止むを得ざる所ながら、愁傷も長きに過るは、却て神に不敬の道、男に似合ぬ愁傷といふべく、意は天に悖り、情弱く心頑なに、智は薄く稚きを示すものがくあるべき筈と知り、又日々耳目にも觸るゝ、有りふれし事共を、何とてかたましき迄心にしめて深く歎かむ、愚かやこれぞ天に背き、死者に背き、造化に背き、尤も道理に悖るもの、凡そ父の死てふ事程、當然なる道理あらむや、世に死者有て以來今日に至る迄、道理は常に「これぞ理の當然」と叫ぶぞよ、朕が願ぢや程に、その無益な愁傷を地に擲ち、朕をば父と思ひてよさて世人をして、卿こそ朕が王位を襲ふべき、人なる由を知らしめよ朕將たまことの父にも劣らざる、恩愛の情を卿に捧げむ、さて又卿がウヰッテンベルヒなる大學に、再遊の志は、尤も朕が望に違へり、願くは我等が待遇に慰籍を求め、廷臣の長ともなり、又我等が愛子として

永く茲に停り給へや

皇后　母が願をも反故になしそ、ハムレット、何卒こゝに停まりて、ウヰッテンベルヒへは行き給ふな

ハム　然らば母上、精々仰に從ひませう

國王　ハテ、これはしほらしい從順な返答、此上は國内に留りて、我等同樣安樂に致し居るがよい、イヤ皇后、ハムレットが此しとやかな心からなる承諾に、朕は心も伸びやかになりしぞや、此心祝に、今より朕は賀宴を開かむ、さて祝砲を雲に放たば、雷と聚く其響き、丁抹王が賀宴の音つれ、隈なく諸天を震動せしめむ、いざ〳〵さらば

と暇やかなる喇叭の聲の中に、一同退場、ハムレット一人殘る

ハム　おゝ餘りに堅き此肉の、溶けて流れて露ともなれや、おゝいかなれば神の掟は、自殺を禁め給ふらむ、あはれ〳〵、浮世の事物はいかなれば、かくも皆な厭はしく、はかなく、あぢきなく、用なきものと思はるゝぞ、おゝ忌々しきは浮世、醜艸の生蔓るに任する庭面、穢はしく忌まはしきもの而已が我物顏、想へば淺ましき世の成行、父王崩御ありて只二た月になるやならず、さばかり英邁の君に在しゝを、彼を此に比ぶれば、日神アポロに牧神セイターを並べし如し、母后をば暴き風にも當てさせ給はぬ御ん優しさ、あはれ想起すも涙の種、忘れもせず母君には、犇とばかりに父君に縋らせ給ひ、いとしさ責めて離れがたなき御風情なりしこともあまたゝび、それに一月經つや經たず――いや思ふまい想ふまい――脆いと云ふ字は女と訓むかや――おゝ一月經つや經たず、ニオベの像もかくやとばかり涙を流し、父君が柩に侍

したりし、其時の屐の土も乾かぬ間に、あはれ母君には、彼の母君には
——おゝ非理非情の獣類だも、さばかり早く夫は忘れじを——何ぞ
や二度の夫定め、人もこそあれ、我父君の弟ながら、父君には似もつか
ぬ事、此身を巨人ハーキュレスに比べしやうな叔父人を、しかも一月
經たぬ中、詐り多き涙の汐が、瞼に紅く殘れるに、早くも二度の夫迎ひ、
早きも事にこそよれ、不義の快樂を急がせ給ふ、御敏捷さを何とか云
はむ、あゝ行末も思ひ遣らるゝ、さるも我はたゞ口を噤みてあるのみ
とは、おゝ裂けも果てよ我が心胸

とホレーシオ、マーセラス、ベルナルド登場

ホレ　殿下御機嫌宜しう

ハム　卿達も達者で重畳、ハテこれはホレーシオ殿か——若し違つたら
容赦あれ

ホレ　いかにもホレーシオでムります僕めでムります

ハム　イヤ我が友、コレ、以來はかう、互に友と呼びかわさうではないか、し
てホレーシオ殿どうして今頃ウヰッテンベルヒから此の處へ——
ヤ、それなるはマーセラス殿か

マーセ　殿下——

ハム　これは嬉しいぞ——(ベルに向ひ)イヤようこそ——(又ホレに向ひ)
實の所ウヰッテンベルヒから歸て來て、卿は何を致し居るな

ホレ　たゞ怠惰心から歸國致したのでムります

ハム　そのやうな事は、卿が敵の口からなりと、聞捨には致されぬ、まして
自ら欺くその言葉を、身に信ぜしめうとは、身が耳を辱かしむると申

すもの、卿がなどて怠惰者てあらう、ハテ、エルシノーアへは何用あつて參つたぞ、なにはさて逗留中に、大酒の稽古を致して取らさう

ホレ　殿下、實は御父君の御葬式に會せむが爲め、參つたのでムります

ハム　どうぞぢや、身を恐弄致して呉れな、母君の御慶事に、列なる爲めてあらうがな

ホレ　まことや殿下、隨分お早い事でムりましたな

ハム　ハテそこが經濟〳〵、葬式の振舞が祝儀の席に役立つとは、何と冷たい御馳走か、とはいへ、ホレーシオ、身は憎き敵に天國で遇ふ恨めしさより、かゝる目に遇しが一層恨めしいぞよ、亡き父君――父君の御姿が見ゆるやうぢや

ホレ　おゝそれは何處に

ハム　イヤ心の眼の中に

ホレ　某も一度拜謁を致しましたが、げに嚴かな御容貌

ハム　どのやうに考へても、彼のやうな御方を、二度と見む事は思ひも寄らず

ホレ　殿下、某はその故陛下を、昨夜正しく拜見致したやうにムります

ハム　見たとはそは誰を

ホレ　亡き御父王を

ハム　我が父王をとな

ホレ　その御驚きは尤ながら、暫し御心を御鎮めなされて、此れなる御兩所を證人に、不思議の一通り御話し申すを御聞あれ

ハム　それこそ聞かいて何と致さう

ホレ　これなるマーセラス、ベルナルドの御兩所には、二夜さ續いて見張の場に、草木も眠る眞夜中頃、かやうな不思議に遇ひました、と申すは、御父王に似たる姿の、頭より足の先迄、殘りなう全身をよろへるが、御兩所の前に現れ出て、おごそかなる足取にて、威風凜々と其邊りを練り歩き、驚き呆るゝ二人の眼前を、やがて手も屆くばかり側近く、三度迄も過ぎりしに、二人は恐怖に肝魄も溶るばかり、默然として遂に詞も懸けざりしと、怖々ながら密かに某への物語、依て某も御兩所諸共、其次の夜見張の場に相詰しに、げに時刻も姿も御兩所の云はれし通り一語違はず、現れ出しは件の幽靈、御父王を見知り奉る某の眼にも、似たとは慾か、此雙の手を比べたやうてムりました

ハム　して場所は何處とな

マーセ　我等兩人が見張の役を仕りし、宮城前の見張の場てムりました

ハム　して卿も物云懸ては見ざりしか

ホレ　某は物云懸て見ましたなれど、返答は致しませぬ、尤も一度頭を擡げ、物云はむずるやうな身構ひを致しましたが、丁度其時鳴き立る、雞の聲にて縮み上り、遽たゞしげに消え失せました

ハム　ハテ不思議千萬

ホレ　去りながら殿下、某が生存へ居ることの確かなると同樣、此事も慥かな事實てムります、さてこれを御耳に入れるは、我等が義務と心得ました次第てムります

ハム　げに〳〵、とはいへ、どうもたゞ不思議てならぬ、卿達は今夜も見張を致さるゝか

マーセベル　その心得にムります

ハム　鎧を着て居たと申されしな

二人　いかにもその通りで

ハム　頭から爪先まで

二人　いかにも頭から足の先まで

ハム　然らば顔は見えなんだな

ホレ　いや見えまじてムります、と申すは面頰が引上てムりました故

ハム　何と、不興な顔を致し居つたか

ホレ　イヤ怒りの御顔と申さうより、寧ろ憂への御顔でムりました

ハム　御顔色は青かりしか赤かりしか

ホレ　いたう青ざめてゞムりました

ハム　して眼を据て卿を見まもりしか

ホレ　ぢつと眼ばたきも遊ばされず

ハム　身も其場に居合はせたかりし

ホレ　それこそ御驚きはいかばかり

ハム　さもあらう〳〵、して長らく姿は停まりありしか

ホレ　一ツ二ツと適宜な早さで、百迄算へる程でもムりましたらう

二人　イヤ最少し長うムつた

ホレ　某の見た時はさうもムらぬ

ハム　御髯は半白でありしか、どうぢや

ホレ　左様でムりました、生前の御姿通り、黑い中に銀のやうなが處々

ハム　今夜は身も見張を致さう、多分又現るゝてあらう

ポレ　屹度現れるてムりませう

ハム　父君の尊き御姿を裝ひ居るなら、たとひ地獄が沸いて出て、物云懸るを留めうとも、身は詞を替さでおかうか、さて卿達に頼みといふは、今迄も此不思議を他人には秘し置きしとならば、此後とても何卒口外致して呉れな、または今夜何事が起らうとも、互の胸に心得居て、これも他言は無用ぞや、卿達が親切は何時か酬ゆる時もあらう、さらばぞ、今夜十一時と十二時の間に見張の場で又會はうぞ

二人　心得ました、殿下に忠勤は缺かぬ我々

ハム　イヤ忠勤などゝ申さずに、親切というて呉りやれ、身が卿達に盡すと同樣、さらば

と二人退場

ハム　父尊靈が鎧姿の御出現とやこれは吉からぬ事があるのてあらう、何ぞ世に顯れぬ惡業が潛むのては、えゝ早く夜にもなれかし、先づそれまては騷ぐまい我が精神、よし大地が掩はうとも、世に惡事惡業の、いつまて人目に見えてあらむや

と退場

第三場　ポロニアス館の一室

レーヤチス、オフリア登場

レーヤチス　行李も皆な積込みたり、さらばこれが別れぞや、コレ妹、追風の吹く度、出船の便のある度に、必ずとも忘りなく、王章の音つれを忘れまいぞや

オフィリア　それをお疑ひ遊ばしますか

レー　またハムレット皇子の情らしい御詞は、ほんのお世辭で御戯れ春寒の早咲菫、珍らしけれど永持せず、芳ばしけれど萎み易く、時の間の薫りしばしの慰みそれだけの事と思ふがよいぞ

オフ　アノたゞそれだけの

レー　それだけと思ふがよい、若き人の育つといふは、筋骨のみにはあらずかし、此躰軀が長ずれば、心精神も次第に長じ、次第に移らふは人間の常、彼君とても、今こそまことに、卿いとしと思すならむ、卿を欺き、ぐさまむなどの、汚き悪意はよもおはさじ、たゞ愛ふべきは、皇子が御身を考へても見よ、皇子が意志は、我物にして我物ならず、御躰軀さへ皇子といへる、格式の奴隷も同然、下賤の者のやうに、たゞ思ふ如くに

は爲し難し、想へばその筈、此君がたゞ一旦の妻定めには、此一國の安寧幸福の懸れるを、御自らが統御なせる、國家一統の願ふ所、認むる所にあらざるよりは、其撰擇も甲斐なき、されば皇子、若し卿いとしと宣ふとも、そはたゞ、かゝる異つた御身分の許す限り、御愛しみを實にし得べきとの御意味と思ふがよい、それとても丁抹中の、聲がゝりなくば無益と知れ、さて又浮ついた御睦言に耳傾け、愛を捧げ若くはまた、操といふ寶物を、理なく乞はれて献ずるやうの事あらば、甲斐なく立たむ卿が名こそ惜しからずや、恐れても恐るべきはこゝぞ妹、情といふ戰場の後陣に控えて、戀の矢丸を避るが專一、慎み深き處女の身は、その美しき顏ばせを、月に見すさへ咎むとかや、貞女節婦も兎角免れ難きは世の誹謗、春の花は開きも果てぬ蕾の中に、虫に喰はるゝ恐あ

り、青春の朝まだき、露も乾ぬ間の若者は、毒霧に犯さるゝ憂多し、用心あれよ、安全は慎みにあり、誰誘はねど過ち易きは若き身の上

オフ　御教訓の趣は、心の護符とも致し、決して忘れは致しませぬ、去りながら兄上様、墮落僧の教示てはなけれど、他人には天國へ行けとて、嶮しい荆路を教へておいて御自分は、何憚らず自墮落に、艶めかしい花の路をお徒歩なされ、妾への教訓などは、省みもなさらぬのではムりますまいな

レー　おゝ左様な心配は無用〳〵、これは心ならず長居を致した、イヤ父上が御出なされた

とボロニアス登場

重ねて祝福頂戴は重ねての幸福と申すもの、再び御暇乞が出來るは

好都合

ボロニアス　まだ此處にか、レーヤチス、見とむない、早う船へ〳〵、風は帆に充ち、一同卿を待て居るわ、身はまたそなたの祝福を祈り置くぞよ、序に示し置く心の教戒、そなたの記臆に刻んで置けや、先づ思ふ事は口になし出しそ、ふさはぬ思慮は實行するな、人とは親め狎るゝは禁物、確實と見込んだ友垣は銅鉄の環にて啞と精神へくゝつて置け、嘴のまだ黄色な、未熟な友にもちやほやして、絶間なき握手故に、掌の感じを鈍くなしそ、喧嘩口論爲ぬがよし、さらずば敵に懲り〳〵させる迄爲抜くがよし、誰になりと耳は貸せ、我聲は滅多な人に聞かするな、人の説は聞くがよし、我が説は仕舞て置け、衣服は財布が許す程の美服がよけれど、人の目を惹くは宜しからず、立派は宜し華美は惡し、衣服は人品

を表すものゝまして佛蘭西にては歴々の人々、分けて衣服に心を用ふと聞く、さて又金は借るな貸しもすな、貸せば金と友とを失ひがち、借れば節儉といふ劍の刃が鈍るもの、さて又何よりも大切なは、己れ自身に信實なれ、さすれば恰も、日あれば必ず夜ある如く、他人に不信なるとあるを得じ、さらばぞ、レーヤチス、祝福に添る此教戒、肝に銘じて忘れてあれや

レー　父上、さらば謹んで御暇乞を致しまする

ポロ　最早時刻も切迫、家來共は相待居れば、少しも早う參るがよいぞ

レー　さらば、オフィリア、此兄が云うたる事を、よう忘れてたもるなよ

オフ　それはよう此胸に藏めて、錠を下してムります、鍵は御預け申しますぞや

レー　さらば

ポロ　兄上がそもじにいふた事とは何事ぢや

オフ　それはアノ、ハムレット君の事に就てゝムります

ポロ　おゝそれよ、よう思ひついた、聞けば此頃皇子には、度々そもじの許に御忍びあるを、そもじも遠慮なう御目に懸るとの事、若しそれに相違なくば――用心せよとの心にて告げて呉れたものは、そのやうに云ひ居つたが――屹度云はねばならぬ、そもじは身が女といふ事、また女の名譽といふ事を、よつく辨へたものとは云へぬぞや、彼君との中はどういふ風ぢや、あからさまに申して見やれ

オフ　此間中から彼君には、度々御情の程を、御打開け下されました

ポロ　御情ぢや、フウ、こんな危嶮な目に遇うたともない、處女らしいその

詞、そもじはお打開とやらを眞實と思ふか

オフ　どう思うて善いやら惡いやら

ポロ　ハテ、そんなら敎てやらう、そんな三文の價値もないお打開を、千金の御詞と思ひ居るとは、そもじはまるで赤兒ぢやと思ふがよい、最少し自分で高くとまるがよいぞ、さらずばそもじは此父を、愚者と世間に吹聽するやうなものぢや

オフ　父上、乍去彼君は、さもおごそかな風て、切なる胸の思ひを、お打開けなされたのてムりますぞへ

ポロ　いかにも「風て」とはよういやつた、あな笑止

オフ　そして父上、あらゆる誓文を天にお立てなされ、御詞の固めと遊ばされました

ポロ　それこそ阿呆鳥を誘くわなぢや、血の氣の燃ゆる時は、いかなる誓文も惜まぬもの、コレ、娘、その燃ゆる焰は、熱はなうて光ばかり、それとても燃ゆると見るまに消ゆるが習ひ、かやうなものを眞の火とばし思ふなよ、今後はちとその處女氣を減らすがよい、よしんば君より會はうとの仰があつても、違背のならぬ君命などゝは思はずに、ちと見識を取るがよいぞ、又ハムレット君は、まだうら若き御身といふこと、女の身のそもじと違ひ、男君は戀に浮身を窶すとも、人は大目に見るが常といふことを、よつく心にとめて置けや、手早く申せば、オフイリア、ハムレット君が誓文を信ずるなよ、誓文と申すは躰のよい囮戸、衣服の色て本性は隱せど、人を邪道に勸むる媒人て、よう欺騙の利くやうに、神樣までも引合に出して、恐れ多い事を申すのぢや、さて引くるめ

て手早く申せば、今後は暫しの暇なりとも、ハムレット君と詞を替すはきつい禁制ぞや、心得たか、命令たぞよ。サア〳〵一緒に來やれ

オフ　唯々、御詞に從ひませう　と退場

第四場　見張場

ハムレット、ホレーシオ、マーセウス登場

ハム　風が肌に喰入るやうぢや、酷う寒い事ではある

ホレ　げに身をつみきるやうな、鋭い風でムります

ハム　もう何時ぢやな

ホレ　まだ十二時には相なりますまい

マーセ　イヤ、最早打ちましてムります

ホレ　左樣でムるか、某は聞き損ねました、さらばそろ〳〵、亡靈の彷徨出る、刻限に相成ります

（遠にて賑やかな喇叭の音、發砲の音聞ゆる）

ハム　あれは何事でムりますな、殿下

ホレ　今夜國王には、徹夜の宴を張りて、大杯を擧げさせられ、只今强飲亂舞の眞最中、さてこそ陛下がラインの美酒をば、一滴ほさせ給ふ毎に、出來た〳〵と、さも大功でも立てたやうに、大鼓喇叭で囃し立るわ

ハム　これは御國の風習でムりますか

ホレ　なか〳〵、とはいへ、身は此風習の中に生れた國人ながら、此風習は守るよりも、棄てた方が名譽と思ふぞ、此の不健康なる强飲の噂は、東

西南北に傳播し、他國人に讒謗罵詈の種を與へ、それ故にこそ國人は大酒と呼ばれ、豚てふ汚名さへ蒙るぞよ、げに此一事は、我等が天下に名高き功業の、名譽の骨髄を拔去るもの、こは一個人の上にもまゝあること、例へば天成の過疵ともいふべき、其素性が賤しい爲め(こは全く其人の罪にはあらず、人は自ら生家を撰むを得ざれば)又は或る天賦の氣質が增長して、道理の墻を破り壁を壞ちたるが爲め、又は或る習癖が度を過し、折角優美な舉動も、忌み厭はるゝやうになりたる爲めなど、只一つの過疵故に——よしその過疵は自然が與へたものであらうと、又は免れぬ運命の賜であらうと、又他に人間のものとも見えぬ迄清く貴く、限りなく深き德を具しながらも、廣い世間の評判には、その過疵より憶測して、誹らるゝとも珍らしからず、一點の汚點故

に全幅の美を毀ち去るは常のことぢや

と亡靈現出る

ホレ　殿下、御覽あれ、現れました

ハム　慈悲の神々も護らせ給へ——抑も汝は在天の靈か、圖府の鬼か、汝が齎らしゝは、皇天の顯氣か、地獄の毒氣か、汝が意志は善か惡か、とにかくに乘措き難き姿にて現れたれば、我は汝に物問はむ、我は暫し汝をハムレットと呼び、王と呼び、父と呼ばむ、いかに陛下、某が問に御答あれ、某をしていつ迄も、疑惑に悶かせ給ひそ、そも如何なれば柩に納め、儀式を盡して埋葬なしたる御屍骸が、經帷子もかき除け給ひし、如何なれば、安らかに葬られ給ひしと見つる御陵は、其重たげなる大理石の顯を開いて、御身を再び吐出したるか、血の氣も通はぬ屍骸の

御身が、再び鎧を引纏ひ、月明滅たる夜を寒み、物凄き御出現、恐かなる生身の我等をして、解しかぬる思ひ惱みに、恐れおのゝかしむるとは、こは、そも何の御心ぞ、その理由を語らせ給へ、さては何ぞ我等に御用ばし候か

ト霊亡ハムレットを手招ぎする

ホレ　一緒に來いとの手招ぎは、何ぞ殿下お一人に、云ひたい事があると相見えまする

マーセ　御覽あれ、あのやうに鄭重な素振にて、彼方へ〳〵と招ぎまする、乍去御出は御無用てムりますぞ

ホレ　必ず御無用になさりませ

ハム　イヤ、こゝては云はぬと見ゆる、さらば後から參て見やう

ホレ　そりやなりませぬ、殿下

ハム　ハテ、何恐ろしい事があらう、命は針の端程も大事と思はぬ此身魂ほゝと申せば彼のもの同樣、不死不朽のものなれば、彼ものとてもいかにかはせむ、又招く身は參らう

ホレ　イヤ申し殿下、若し海中へなりと殿下を誘き寄せ、又は海上に屹立せる、峨々たる巖の頂上へなど連てゆき、さて俄かに異形の鬼と現じ、殿下の御心を攪亂し、狂氣の躰になし奉るなどの事があらば、ハテ、何となされまする、考ても御覽じませ、若し左樣の場處へ御出あらば、さらてだに千尋の海底を見下して、碎る浪の音を聞く中には、何心ともなく、ふと身を投げうなどの、恐かしい考の出るものてムります

ハム　また招いて居らるゝ――いざ參らむ、案内せられよ

マーセ　それはなりませぬ……

ハム　イヤ其手をお放しやれ

ホレ　御聽分なされませ、御出になることはなりませぬ

ハム　これも畢竟、我が宿命の命ずるところ、かく思へば、我躰中のあらゆる血脈、猛獅の筋にも劣らぬ力を得來るぞや　と亡靈又差招ぐ

まだ招いて居らるゝ、放せ兩人　と振切りゆく事

留め立て致さば、己れも亡靈の數に入れて呉れうず下れ〳〵――い

ざ御供を致しまする　と亡靈、ハムレット退場

ホレ　餘り御威が高ぶつて前後の御考もなら

マーセ　後をばお慕ひ申さうてはムらぬか、御詞に從ひ打棄置くもいかゞてムる

ホレ　いかにも後から追懸け申さむ――さてどういふ成行になるとやら

マーセ　何ぞ丁抹の國家に、吉からぬ事があるのてはムらぬ

ホレ　たゞ天に任すより致方がムらぬ

マーセ　イザ〳〵、お後をお慕ひ申さむ　と一同退場

第五場　見張場の續き

亡靈、ハムレット登場

ハム　何處へお連れなされます、お話し下され、此上御供は御免あれ

亡靈　こりや聞け

ハム　承りませう

靈　火宅の焔に、此身を委ぬべき時刻は、早や迫れり

ハム　あなあはれの亡魂や

靈　我を憫むその暇に、我が物語をよつく聞けよ

ハム　お語りなされ、聽聞致さう

靈　聞かば復讐の心燃が肝腎ぞよ

ハム　何と仰せられます

靈　我は汝が父の亡魂なるが、存生の時犯しゝ罪業の燒盡され、清淨の身となるそれ迄は、晝は火宅の焔の中に籠り、夜は地上を彷徨ひ歩く迷執の餓鬼なり、たゞ我牢獄の秘事は漏し難し、若しその一端をだに漏すを得ば、汝が精神を動顛せしめ、汝が若き血を凍らしめ、汝が兩眼を飛出でしめ、汝が毛髮を一筋毎に逆立たしめ、恰ら彼の怒れる豪猪の刺の如く、恐ろしの有樣となさむことも容易なり、されども閻府の音つれは、血肉の耳に入れ難し、聽け〳〵、よつく聽け、若し汝我をいとしの父と思ひたらば

ハム　おゝ神よ

靈　父が卑怯の殺害に、非業の最期を遂げたりける、其讐憤を晴らし呉れよ

ハム　殺害とな

霊　殺害といつぱ、いかに輕きも卑怯の骨頂、まして此れは卑怯も卑怯、例なき暴逆非道

ハム　早や〳〵其いはれをお聞かせ下され、さらば心の物に應ずる如く、又は戀人の胸に通ふ思ひの素早さもて、復讐の準備に後とも云はず

霊　頼もしき汝が振舞、げに之にて心を動かさずば、彼のレーセ(三途)の川の岸に生ふる、忘草にも劣る無感の鈍物、いかにハムレットよく聽けよ、菓園の裡の假寢の枕に、毒蛇に螫されて我は死せりと披露められ、丁抹中の人民も、まんまと欺され了んぬれど、安んぞ知らむ、汝が父を螫し殺しゝ、その毒蛇こそは今王冠を戴き居るなれ

ハム　おゝ虫が知らすか、心にどうやら、左樣の疑念の存せしが、さては彼

の叔父君が

霊　いかにも彼の邪淫不倫の獣め、忌まはしき狡才滑智に、女人を迷はす魔力あるか、我が操正しげの皇后をたぶらかし、不義の快樂にふけるうたてさ、おゝハムレット、こはそも何たる墮落ならむ、婚儀の式のその砌り、誓ひし詞に一句違はず、誠の愛を續けたりし此我を振棄てゝ、我に比しては何取柄あるべしとも思はれぬ、痴漢の許に奔るとは、げに誠に操正しき婦人ならば、神々に誘はれうと、仇し心は動かさじものを、浮氣女のはかなさは、神の樣な夫を有ても、尚ほ口腹の慾をかわき、撮み食の不品行に玉の床を汚す習ひ、されば見よ、はや曉に間もあるまじ、つゞめて語て聞さうなら、いつもの通り或日の午後、我は菓園の中に熟睡せしに、時を測りて汝が叔父、毒藥の壺を手にして忍寄

り、我耳の穴に注ぎ入れしに、元と此藥は人間の血潮の大敵にて、水銀の滴の轉ぶやうに、體内の門戸を潜るや否、脉管の大路小路を駈け廻り、恰ら彼の乳汁の中に、酸を滴らしたらむ如く、清き血潮を攪亂し、凝結まらしむるものなれば、我血潮とても之に漏れず、滑かなりし我皮膚は、何時の間にか、かきたゝれて、天刑病の如くなり、かくて一睡の假寢の暇に、我は我が命、我王冠、我皇名を、一時に同胞の爲めに奪はれ了んぬ、別きて臨終の懺悔もせずに、殺害せられし口惜さ、寢首をかゝれしも同然なれば、彼世に往くべき準備もなく、恐ろしの罪を抱きしまゝ、神の法廷へと逐遣られし、何ぼう恐ろしの事共ぞ、汝若し情あらば、何條たゞ傍觀して、寸抹王の玉の床を、煩惱の犬の汚すがまゝに任せてやあるべきとはいへ縱令汝復讐の事に志すとも、夢汝が母を怨み、

不孝の所業を企る樣の事なかれ、たゞ天の意志と、良心の棘の刺すにまかせ、我と我が罪の苦痛に泣かしめよ、さらばよ我が子、アレ見よ曉も早や程なしと見え、螢の光も薄うなりしぞ、さらば〳〵ハムレット、必ず我をば忘るなよ

と亡靈消失する

ハム　おゝ天神地祇、さては地獄の惡魔も我を扶けよ、おゝ何たる淺ましさ、確固なれ我心、さては我が筋よ骨よ、俄になゝ老い朽ちそ、我をばまかと支へ行け、「必ず我をば忘るな」となげに慣むべき亡魂、亂れたりとも此頭に、苟も記憶といふものゝ殘れる上は、何條おんみを忘るべき、「我をば必ず忘るな」とか、我は我が記憶の帳簿より、若年の見聞もて、是迄記し留めたるばかなくおろかしき記錄、物の本にて得たる教訓、事物、

の面影、過去の感想、あらゆるものを悉く拭去り、後には父尊靈が只今の詞をのみ、鮮やかに記し置かむ、左なり天も照覽あれ、おゝこよなう淺ましの女性。おゝ汝惡漢、微笑を湛へた大惡漢、あはれ微笑顔の者にして尙ほ惡漢たるを得べしとは、それよ、わが覺帳に記し置くこそよかんめれ、他國は知らず、我が丁抹國にては、げにかゝる事もありげなり（記帳へと記しつゝ）いざ叔父人汝の事は記したり、此上は父尊靈の御詞「さらば〳〵、我をば必ず忘るなよ」（ト記して）イヤ我は誓て忘れじ

ホレーシオ　（奥より）殿下、殿下

マーセラス　（奥より）ハムレット殿下

ホレ　（奥より）天も皇子を御加護あれ

ハム　おゝさうぢや

ホレ　（奥より）オゝイ〳〵ハムレット君

ハム　こゝぢや〳〵早う來い

（ホレーシオ、マーセラス登場）

マーセ　いかゞなされました、殿下

ホレ　どういふ事がムりましたな

ハム　おゝ意外千萬

ホレ　ハテそれは承りませう

ハム　イヤ〳〵、郷等は口外致すてあらう

ホレ　某は誓て左樣の事は

マーセ　某とても同じ事

ハム　若し語り聞かさうなら、郷等は何と云ふてあらう、苟も人情あらむ

者、かやうの事を想ひやらば――乍去卿等は口外致さぬとな

兩人　審て左樣の事は致しませぬ

ハム　凡そ此丁抹に住居する惡漢にして、破廉恥漢ならざるものは一人もあるまい（譯者曰く、こはハムレットが非實を語らんとして、ふと餘り親密ならぬマーセラスの在るに氣付き俄に談話をまぎらせしものならむ）

ホレ　ハテ、亡靈はそれしきの事をいふ爲めに、わざ〳〵墳墓を出て來たのではムりますまい

ハム　いかにも尤ぢや、尤ではある、乍去手短がに申さうなら、此のまゝ手を握て別れるがお互の爲め、人として爲すべき業、爲したき願のなきものもなければ、先づ他人事は後に致すが宜しからむ、さて身はと申すに、これから往て祈禱でも致す心得

ホレ　こは餘りにすげなき御詞

ハム　氣に觸つたら、不肖の罪は許して呉りやれ

ホレ　罪などゝ勿躰ない、左樣の事はムりませぬ

ハム　イヤ、ところがある、一大罪惡があるのぢや、さて彼の亡靈に就ては彼は正眞の亡靈なることだけは告げて置かう、其亡靈と身との間に、如何なる問答を致したか、そは叩きたからうが耐へて呉りやれ、しては又卿達は、身が腹心として、學者として、軍人として、一つの頼みを聞いては呉れまいか

ホレ　何事でムりますな、殿下、聞かいて何と致しませう

ハム　今夜見し事は一切秘密に致して貰いたいのぢや

兩人　畏りました、その通りに致すでムりませう

ハム　然らばそのやうに誓文を立てい

ホレ　神以て口外は致しませぬ、殿下

マーセ　某とても神以て口外致しませぬ、殿下

ハム　イヤ此劍の欄の十字にかけてお誓ひあれ

マーセ　最早兩人共誓文を立てました、我君

ハム　ハテ身が劍の欄にかけてと申すに

亡靈　（地下にて）誓文立てい

ハム　ハヽア卿（亡靈を指す）もさういやるか、ハテ卿は其處にか――コレ〳〵

兩人、今の地中の聲を聞いたか、早う承諾して誓文立てい

ホレ　然らば誓文の詞を仰せられませ

ハム　今夜見し事をば、決して口外致さぬと、身が劍にかけて誓て呉りや

れ

靈　（地下にて、但し以前よりも彼等の立てる辺りへ近寄りし模様）誓て呉りやれ

ハム　彼方此方と歩き廻る、然らば傍へ寄て見やう――卿達もどうぞ此方へ、して卿達の手をば、又身が劍の上に乘せて、今聞きし事を、決して口外せぬ樣誓て呉りやれ

靈　（地下にて、但し又以前よりも彼等が立てる辺りへ進寄る）誓て呉りやれ

ハム　ハヽ、いしくも云はれたり土龍殿、地の中をば、よくも左樣に速に歩かれたもの、ほんに熟練な技師ではある――ハテ卿達最一度此方へ

ホレ　おゝこれは〳〵、不思議千萬、珍無類

ハム　されば珍客ぢやに由て、よう待遇てお呉りやれ、ホレーシオ、凡そ天地の間には、かいなての哲學などで、中々夢想も及ばぬ物があるぞよ、

さりながらホレーシオ、身は此後わざと行狀を變さねばならぬやうの事があらうが、其時身が變つた舉動を致すを見て、このやうに腕くみをしたり、首を振つたり、又は我こそ其底意は知り居れり、云はむと思へば、又云うてよくば云ひ得べし、さては知れる者もなきにはあらずなど、意味あり氣なる詞を吐き、かりそめにも此身に就て、知る所ありげのほのめかしなどは、必ず〳〵せぬ樣に誓て呉りやれ、まさかの時の、神のお慈悲にかけて誓て呉りやれ

（地下にて）誓て呉りやれ

ハム　最早鎭まり給へ悶えの靈――

と兩人誓を立る

さて此後とも卿達には、身を何かとかばうて呉りやれ、身とても不肖な此身に叶ふ事なら、何なりとも友愛の志は缺かぬ心算、いざ參らう、今の事は何卒何時迄も口を噤み呉れよ、さても浮世の節はくるひたりな――あな恨めし、身は其を癒やすべう生れたりとは――いていて連れ立て參らう

と一同退場幕

第二幕

第一場　ボロニアス館の一室

ボロニアス、レイナルド（ボロニアス家來）登場

ボロニアス　此金子と書附をば、悴にどうぞ渡してお呉りやれ、レイナルド

レイナルド　心得ました

ボロニアス　乍去、先づ悴に逢はぬ中、よう賢く立廻て、悴が身持を糺すがよいぞ

レイ　僕もその心組てムります

ボロ　イヤそれてこそ身共も満足、さて先づ巴理には、如何やうな丁抹人が滞在致し居るや、其人々の姓名は何、如何なる風に活計し居るか、何を資本に致し居るや、如何なる處に住居致すか、如何なる者と交るや

その爲め如何程の金子を費すや、そこを一つ調べた上、遠廻しに段々と問詰めて、悴を知り居ると申す者があるなら、談話の題目を其方へ移し、我とても彼男ならば知らぬにもあらずといふ風をして、某は彼が父親を承知致す、彼が友人にも知己はムる、彼男とても滿更交際つた事のないのでは」などゝ申すがよい——よしか、レイナルド

レイ　宜しうムります

ボロ　「彼男とても滿更交際つた事のないのでは、尤も入懇と申すてはムらぬ、去りながら、其男に相違なくば、隨分放縱な、道樂の多い男てムる」などゝ申してな、何てもよい加減の虚言を並べるがよいぞ、悴が名譽を汚すやうなことだけは慎んてな、たゞ自由な若者には、附物と人も許すやうな、取留もない普通な道樂を並べるが宜いぞ

レイ　例へば賭事のやうな

ボロ　又は飲酒、撃剣、喧嘩、口論、女郎狂、是位迄は宜しい

レイ　イヤそれ迄申しては、御不名譽に相なりませう

ボロ　イヤならぬ、たゞ其方の口のきゝ様で、手和かに申せばよい、乍去無節操な男ぢやなどゝいふ誹謗は一切申すてないぞ、それは身共が趣意でない、たゞそこを程ような、誰にも有りがちな、自由な境界より起る過失で、燃ゆる心の焔の閃めき、又は血盛りを、抑へる者のないので起る、不品行とも思はれるやうな風に申して呉りやれ

レイ　去りながら御前――

ボロ　何故かやうな事を致すかとの尋ねか

レイ　中々、それが承りたうムります

ボロ　ハテそれはかういふ趣向ぢやが、間違のない妙案てあらうず、前申せしやうに、悴が些細の欠點をば、物に着いた汚れめてゝもあるやうに陳べ立てうなら、其時若し、其方が探りを入れた話對手が、現在悴の不品行を見た者ならば、それこそ屹度相槌打ち、「いかにも貴殿」とか、「親友」とか、さては「尊公」とか、國の風習若くはそれ〳〵の人に對する尊稱を用ゐて其方を呼び……

レイ　いかにも

ボロ　さて彼が此事を……彼は之を……ハテ身共は何を云はうと致したのか知らぬ、待てよ確かに何ぞ云はうと致したのぢやが、打留は何といふ文句でありしか、其方は覺えおらう

レイ　「屹度相槌打ち」「げに〳〵親友とか」「尊公」とか申す御詞て

ポロ　「屹度相槌打ち」いかにも〳〵、對手の男は其方の詞の尾につき、「某も其御方を承知致す、昨日も、此間も、又はかく〳〵の時にも、かく〳〵の人々と御一緒の處を見懸申した、そして彼處では賭事を爲てゞムりました、此處では醉潰れてゞムりました、又何處其處では庭球戲ていさかひを爲てゞムりました」などゝ申すであらう、又は「かく〳〵の店へ這入る所を見かけた事もムる」などゝ、則ち登樓などを申すので、パテこれで合點が參つたであらう、これが虛謂の餌で眞實の鯉を釣るといふもの、智勇兼備の我等は、かく遠廻しの權謀に依り、裏から廻て表を知るは、何と妙か、されば、身共が最前から申聞けた手段にて、悴の行狀を探て參れ、どうぢや、合點が參つたか

レイ　參りましてムります

ポロ　さらば堅固で參れ

レイ　さらば御暇仕りまする

ポロ　其方自身にも、熟と悴の樣子を見て參れよ

レイ　畏りましてムります

ポロ　そして彼奴には勝手な行狀をさせて置けよ

レイ　心得ました

ポロ　さらばぞ

とレイナルド退場

オフィリア登場

これはオフィリア、何事ぢやな

オフ　おゝ父上樣、妾は怖い目に遇ましたわいな

ポロ　とはまた何に

オフ　父上、妾は彼方の居室で、針仕事を致して居りましたに、ハムレット君には、襯衣の前もほら〳〵と、帽子も召さず、靴下は汚れて、紐も結ばねば、踵の處に垂れまつわり、お顔の色も眞青に、膝と膝とは、がた〳〵とぶつかり合ひ、其御樣子の物凄さ、恐ろしさ、閻府の光景を告げんとて、今地獄から出て來られたといふ風情で、それて妾の前へ御出てになりました

ポロ　そもじに戀焦がれた餘りの發狂か

オフ　妾は存じませねど、若しや左樣ではないかとも思はれます

ポロ　して何と仰せられたな

オフ　妾の拳を握て、ぢつとお占めなされたまゝ、御腕の伸る限りずつと後退つて、片手をかう御眉の上に翳し、妾の顔をば、それは〳〵、繪像でも取るやうに、長らくの間お見詰めなされた後、そと此の腕をお振りなされ、三度ばかりお頭をかう點頭かせ、さて五躰も裂け、お命も絶えよとばかりの、いたましげな、深い〳〵御溜息、漸う妾の拳をお放しなされても、お顔は此方へ後ろ向に向けたまゝ、戸口の外に御出なされしまて、御足元には少しも搏はず、お眼は始終妾の方ばかりを御見詰めなされてゞムりました

ポロ　ハテ、早速陛下に拜謁を願はう程に、そもじも來や、これは何でも戀故の御發狂、そも〳〵戀と申す曲物は、我等人間を苦むる、諸々の情慾と同じく、その性猛烈、一たび破裂しては、いかな狂暴な行爲をも爲かねはせぬもの、ハテ御氣の毒な事てはある、そもじは近頃、何ぞ手暴な詞でも、彼の君に申上げはせなんだか

ホフ　左樣な事はムりませぬが、父上の御申付に從ひ、御文を一切御遲し申し、又妾に逢いたいとの、御請求をお斷り致しました

ポロ　それて御發狂なされたのぢや、イヤ彼時もつとよう氣を付て、熟と君の御樣子を見定めなんだが殘念ぢや、身共はまた、これは屹度君の御戯れて、そもじを陷れむ爲ぢやと疑うたが、想へば老の癖目忌まはしい、さて〳〵若い者の向ふ見ず、年老の思過し、お定りとは云ひながら殘念〳〵、いざ少しも早う陛下に此事を言上致さずばなるまい、隱しておいて申上ねば、申上て一時の御不興を受るよりも、却て後日の悔を殘すてあらう

と二人退場

第二場　宮城内の一室

賑やかなる喇叭の聲の中に、國王、皇后、ローゼンクランツ、ギルデンスタン、及び侍從若干名登場

國王　ローゼンクランツ、ギルデンスタンの兩人には、ようこそ參內、かく取急ぎ卿達を召寄せたるは、たゞ卿達に逢ひたしとの念の外に、ちと依賴致したき用向あり、と申すはは薄々聞及びつらむが、ハムレットが此頃の變りやう、外觀も內心も、既やありし面影を留めず、かく迄彼をして正氣を失はしめたる其原因は、父を失ひし悲嘆の外に何なるべき、朕が少しも想ひ至らぬ處なり、依て卿達に依賴と申すは兩人共幼少の折より、彼と共に生長て、彼が若氣の氣質を承知の事故、何卒

今暫く宮廷に留り居て、彼が相手を致し、慰安の道に誘ひ、折もやあらば、彼が心中に思ひ惱める、朕が知らぬ秘密あるや否やを、密かに探り見れよ、其秘密の一度開かれし上は治療の道は朕にあらうぞ

皇后　卿等の事は、兼て彼も度々噂を致し居る程なれば、卿等ばかり彼が信じ居らむ者、又と二人はよもあるまじ、此上は今暫し此處に停りて、我等が爲めに好意を盡され、彼が病氣本復の望を叶ひさせ給もるなら、陛下には屹度相當の御謝禮を遊ばすことでムりませうぞ

ローゼンクランツ　これはしたり、我等は臣下の者でムるに、兩陛下には、御思召の程を、たゞ御命じ下さらいて、御依賴などゝは恐縮千萬

ギルデンスタン　何はしかれ我等兩人、謹て御受け申し、何なりと力の及ぶ限り、御用に立ちまする心躰にムります

國王　忝ないぞ、ローゼンクランツ、ギルデンスタン

皇后　嬉しいぞや、ギルデンスタン、ローゼンクランツ、さらば何卒今よりすぐに、あの變り果てたる我子の許を見舞うてたもれ——（侍從に向ひ）誰ぞ御兩所を、ハムレットが居室へ案内しや

ギル　何卒我々の御對手にて、彼君を御慰め申し、御本復の御一助ともなるやうに、天の御加護を祈りまする

皇后　アーメン

（ポロニアス登場　ローゼ、ギル二人退場）

ポロ　陛下、兼て那威へ御遣しの使臣達には、只今喜び勇んで歸着致されました

國王　おゝ卿は何時も、吉報を齎し呉れて忝ない

ポロ　恐入ります、精神は上帝に、忠義は君に、棒げて置く某と思召下されよ、さて又某はハムレット君が、御狂氣の理由を見出しましたやうに存じまする、若し此推察が間違つたら、最早此白髮頭も、物の詮義は昔のやうにもないと申す者でムります

國王　おゝ然らばそれ語り聞かせよ、少しも早う聞きたいものぢや

ポロ　イヤ先づ彼の使臣達に、拜謁を仰せ付けられ、其陳述を御聽聞遊ばさるやう、某の物語は御本膳の後の御茶受となされませ

國王　然らば使臣等は、卿よしなに茲へ伴ひ參られよ

ポロニアス退場

國王　ガートルード、ポロニアスがハムレット發狂の理由を見出したりとよ

皇后　とは彼の、誰が目にも見ゆる父王の崩御と、此身が再婚の卒急さとに、外ならぬ事と妾は思ひまする

國王　兎も角も、よう糺明致して見やうぞ

ポロニアス、使臣ヴルチマンド、コルネリアス登場

ようこそ兩人、して那威王よりの返答は何とであるぞ、ヴルチマンド尤も鄭重なる御挨拶にムります、我が陳述を聞かせらるゝや否、老王には早速甥の君の徵兵を差留め給ひしが、こは全くポラック征討の、出師準備とのみ思召されしを、熟と詮議の上、果して我が邦に對する御不埒と分明し、御病氣御老年の爲め、御緩怠の結果、かく欺かれしかと、いたく御悲嘆あり、直ちにフォーチンブラスを召寄せ給へば、フォーチンブラスも、とう〳〵仰に從ひ罷出で、いたく御譴責を蒙りたる

末、叔父王の前にて爾後我邦に對し敵對の企てなど、決して致さゞるやう誓文あり、老陛下にはかくと聞召されて、悅喜の餘り、年額三千兩の土地を御差遣に相成り、又乘て徵發の兵卒は、ボラック征討の爲めに用ふべき御許可ありて、さてそれにつき此に記しゝ如く（と書付を國王に渡す）其軍勢をして、事なく我國内を通過せしめ給はるやう、陛下に御願ひ申すとて、即ち相互の安全を圖る旨の條件は、斯の通りでムりまする

國王　それでこそ朕も滿足、何れゆる〳〵氣を鎭めて熟讀し、熟考の上返答致すてあらう、先づ今日は卿の役目も首尾克く濟んで大儀でありしぞ、暫く休息致すが宜からう、後刻夜食を倶に致さむ、さらば

とヴル、コル二人退場

ボロ　さて是にてこれは落着致した――さて兩陛下、御聞き下され、君の君たり、臣の臣たる、畫の畫たり、夜の夜たり、時の時たる譯を申述るは、たゞ徒らに夜や畫や時を費す譯でムりまする、されば簡短は知惠の精神、冗長は其形骸、其裝飾ぢやに依て某は簡短に申上まするが、ハムレット皇子には御發狂なされました、なぜ御發狂と申奉るぞと申すに、抑も眞の狂氣と申しまするものは、乃ち發狂致せしに外ならぬでムります、さりながらそれは先づそれと致して――

皇后　詞の文を少なく、事實を多く述べてはどうぢや

ボロ　陛下、某は誓て文は少しも用ゐませぬ、皇子御發狂の事は、眞實でムります、其眞實なるが悲むべきでムります、其の悲むべきが又眞實でムります、イヤこれは愚かしい繫詞先づこれは止しまする、某は文飾

を用ゐませぬ故、何はしかれ、御狂氣なされし事は明白、此上はたゞ此の樣な結果を來した其原因、いやさ此樣な不結果を來した其原因を尋ぬるだけてムります、なぜかと申せば、此樣な不結果な結果とても原因なうては叶ひませぬ、されば此上尋ぬべきは此事て、それは即ちかうてムります、いざ〳〵御聞下されよ、さて某は一人の女を有ちまする、と申すは彼女が某の手許に在ると申す事て、其女が御覽あれ、父への義務と柔順にも、これを某の手許へ差出しました、先づ熟と御聽聞あれ（と手紙を取出して讀む）

いとも神々しき、我が魂魄の守本尊、艶麗なるオフィリアの君へ

これは拙い文言、艶麗は拙い文言、去りながら先づ後を御聞下され

君が眞白なる懷の柔肌近う秘められむとてゞ、此のされ歌を參

らする

皇后　して是はハムレットよりオフィリアへか

ポロ　先づ〳〵陛下御聞下され、何事も包み隱しは致さぬ某（と續けて讀む）

星の光は消ゆるとも
　日の運行は留まるとも
眞理は虛言にかはるとも
　いかてかはらむわが戀は

あゝいとしのオフィリア、われは歌才拙く、わが深き心の思ひを陳べむ術を知らず、さはれわがそもじを戀ふる心の、いとも〳〵切なるを夢な疑ひ給ひそ、かしく

此躰軀の生存ふる限り、渝ることなきそもじが戀人　ハムレットより

これは父の命に從ひ、女が某に差出したるものにムりますが、此外、彼君が女に向ひ、何時何處で何うして何ういふお詞があつたといふ事迄、悉く某の耳に入れましてムります

國王　してオフィリアには、いかゞ此戀に酬えられしな

ポロ　陛下には某をば如何なる臣と思召されます

國王　忠臣義臣と思居るぞよ

ポロ　某も其通りてムるとを御覽に入れたうムりまする、去りながら、若しも某が、皇子の戀の火の手の、彼程盛なるを承知致しながら――これは娘が申し出てし其前より、既に某は認めましたが、かく承知致しながら、机の抽出や手帳てゞもあるやうに、秘密をちやんと藏めながら默て居、若くは某が心をわざと眠らしめて、感ぜぬ振を致し、さては見て見ぬ顏に、此戀を打棄置など致したなら、それこそ陛下には、まつた后の宮には、果して何と思召されませうぞ、然るに此某は爲すべき事をちやんと致し、女に向て「こりや女ハムレット君は皇子ぢやぞや、其方風情とは違つた御身分、若しもの事があつてはならぬ」かく申しながら、更に此後は、彼君が御出あるも、固く面談を謝絶し奉り、中使の者にも一切逢はず、御贈物には手をだも觸れざるやうと申聞ました處、娘は其甲斐ありて此警告を相守りました、然るに彼君には、かくる何事も拒絶せられましたる結果、端折て申上まするが、憂愁に陷らせ給ひ、それより斷食、それより不眠、それより衰弱、それより心氣錯亂、と

かやうな順序にて、遂に一同が嘆きの種なる、あの御狂亂の躰にならせられましてムります

國王　卿もこれてあらうと思ふか、どうぢや

皇后　いかにも、そんな事もムりませう

ポロ　某が斷然かうと申上ましたる事に、何時間違つた例がムりまする、若しあつたら承りたうムります

國王　それは朕も記憶はない

ポロ　若しも此推察が間違ひましたなら、此（手なし）から此（侍從長のもつ）を取り下さりませい（譯者曰、侍從長の職を辭へよとの意）手緩りさへあるならば、縱令、奈落の底までなりと堀りぬいて、眞相を尋ね當てねば、氣の濟まぬ此某

國王　去りながら、此上の證據を見るには、何う致したものてあらうぞ

ポロ　それには御承知の通り、皇子には折々此のお廊下を長らく御運動なされます

皇后　ほんにさうぢや

ポロ　其時某は皇子の御前へ娘を放ちます、さて陛下と某とは、帳惟の後に隱れ居て、會合の模樣を見屆ましたる上、若し皇子女を愛し給ふ樣にも見えず、從て御發狂の原因もそこにないといふ事なら、此某は早速國家樞要の地位を擲ち、土百姓と相成る心得

國王　さらばそのやうに致して見やう

皇后　モシ御覽なされませ、それ其處へ噂の主が、何か讀みながら、見すぼらしげのなりて參りました

ポロ　兩陛下とも何卒あちらへ〳〵、某は早速御挨拶を申上げ、御心中に探りを入て見ませう程に

と國王、皇后、侍從等退場

ハムレット書を讀みながら登場

ポロ　恐れながらハムレット殿下には、御機嫌克う入らせられまするか

ハム　ありがたい事に大丈夫てあるぞ

ポロ　殿下には、此某を御承知遊ばされますか

ハム　よう知て居るぞ、汝は漁人ぢや

ポロ　違いまする殿下

ハム　然らばせめて、漁人の樣な、正直な人間にしてほしいな

ポロ　何、正直な人間に

ハム　いかにもその通り、今の世上の有樣では、正直者は萬人の中の一人ぢやもの

ポロ　これはいかにも御尤でムります

ハム　日の光も、犬の屍骸を甘しとて接吻し、蛆虫を湧かしもせば（と讀みながら若くは讀む振をしながら）――コレ汝には女があるか

ポロ　ムります

ハム　あらば日中出さぬがよいぞ、物を知るといふ事はよい事ぢやが、打棄置けば、娘御は宜からぬ事を知るであらう、よう氣を付るがよいぞよ

ポロ　（傍白）どうぢや某が推察通り、まだ娘の事を思うて居らるゝ、それて始めには某が識別らず、漁人ぢやと仰せられた、イヤ隨分深う陷り込

まれた、想へば此身とても若い時分、戀故には隨分と苦勞したもの、やがてこれ程でもあつたらうか、どれ、最少し話し懸けて見やう、モシ殿下、お讀みなさるゝは何でムりますな

ハム　文句、文句、文句ぢや

ポロ　してそれは何を論じたもので

ハム　論じたとは誰と誰とか

ポロ　イヤ殿下の讀ませらるゝは、何を論じたものでムりますな

ハム　これは誹謗ぢや、ハテ、口の惡い男が茲にかういふ事を書いて置くわい、老人には白き髯あり、顏は皺くちや、眼に琥珀の滴、桃の脂を垂れ、智惠は半間で腰はよろ〳〵、何と此通りであるとは疑ないが、さればとてかうあからさまに、書付け置くとは餘りに無躾、何故かと申せ、汝

とても蟹の樣に後へ這ふ事が出來たなら、身共同樣老人であつたらうもの

ポロ　(傍白)譫言ながら秩序があるわい――殿下ちと閑靜なところを御散歩は如何でムります

ハム　閑靜な處とは墓穴へか

ポロ　げにそれこそ閑靜な處でムります、――(傍白)イヤ時にうまい事を仰せらるゝ、正氣なものでは、中々云ひ得ぬ處を、狂人が却てうまく云當るものぢや、どれ御前を退つて早速娘と御逢せ申す工夫を致して見やうか――殿下、某は御暇を頂戴致しまする

ハム　何、暇を頂戴致す、それは何を遣すよりも容易い事ぢや、命は別と致して、命は別と致して

ポロ　さらばこれにて、殿下

ハム　えい面到臭いは老人共ぢやや

とローゼンクランツ、ギルデンスタン登場

ポロ　貴殿方にはハムレット君を御尋ねなされますか、さらば彼處にお出なされます

ローゼ　これは〳〵忝ない、さらば

とポロ退場

ギル　我が尊敬し奉る殿下

ローゼ　我が尤も親愛なる殿下

ハム　これは〳〵良友達、如何致した、ギルデンスタン――それなるはローゼンクランツか、景氣はどうぢやな、兩人

ローゼ　善惡共に別段の事はムりませぬ

ギル　餘り仕合せ過ぎぬ處が、仕合せにムります、運の女神の、冠の上の珠でもムらねば

ハム　同じ女神の靴の裏でもないといふのか

ローゼ　左樣でムります

ハム　さらば丁度女神の腰の廻り、程のよい所ぢやな、さて何か新らしい話はないか

ローゼ　何もムりませぬが、たゞ世人が正直になつたと申す事位のものでハム　然らば世界滅却の日は近いと見えるな、さりながらその噂は眞實であるまい、それはさうと、もつと委しく聞きたい事がある、卿等は如何なる咎で、運の神から、此んな牢屋へ送られたのぢや

ギル　牢屋と仰せらるゝは

ハム　丁抹は牢屋ではないか

ローゼ　然らば世界はみんな牢屋で

ハム　いかにもその通り、檻房、密室、穴牢などが澤山ある、丁抹などは其中

でも最下等の牢屋ぢや

ローゼ　某共は左樣には思ひませぬ

ハム　ハテ、然らば卿等には牢屋でないのぢや、凡そ物は善惡共、皆な心の

思ひなし次第ぢや程に、乍去身には牢屋ぢやわい

ローゼ　ハテ然らばそれは殿下が、餘り大望をお有ちなさる故、殿下の思召

には、丁抹國が狹過るのでムりませう

ハム　イヤ〳〵、身は胡桃の殼の中に閉ちられても、たゞ惡夢にさへ襲は

れずば、尙ほ自ら無邊界の王と觀じもせう、

ローゼ　それその御夢が即ち大望でムります、そも〳〵大望の實躰と申す

は、たゞ夢の影に過ぎませぬ

ハム　夢そのものも影に過ぎぬわ

ローゼ　實に〳〵、されば こそ某は、大望と申すものは、影の影に過ぎぬ、誠に

はかないものと思ひまする

ハム　然らば大望をば少しも有たぬ乞食共が實躰で、大望を有つ帝王や

英雄豪傑は、其乞食共の影であるわい、イヤ身は最早問答は出來ぬ程

に、宮中へ參らうではないか

ローゼ　何處へなりと、お側に侍きまする

ギル　それは迷惑、身は卿等を他の家來同樣には思はぬ、正直の處を告げ

やうなら、身は餘り侍かれ過ぎて困り居る、それはさて置き何事も遠慮なう尋ぬるが、卿等は此のエルシノーアへ何用あつて參られしな

ローゼ　たゞ殿下をお見舞申す爲め、外に何の量見もムりませぬ

ハム　身は乞食同樣の衰れなもので、人に陳ぶる謝辭さへも碌々もたぬが、それでも卿等には謝辭を呈する、たゞ其謝辭は卿等の親切に對照して、少々ばかり不足であらうぞ、して卿等は誰ぞに呼ばれたのではないか、果して自己の心からか、他人の指揮などは受けなんだか、コレ打明て話して呉れよ、コレ〳〵話して呉れと申すに

ギル　何と申上て宜しいやら

ハム　何とでもよう合點のまゐるやうに、イヤ卿等は呼迎へられたのぢや、卿達の溫厚な心では、包み了せぬ自白の色が、顏にあり〳〵と見ゆ

るぞよ、王后兩陛下より、わざと卿等を呼迎へしに相違あるまい

ローゼ　そはまた何の爲めに

ハム　何の爲めとは此方より尋ぬる詞、去りながら身と卿等とは親しき友垣、幼少より共に生長し、生涯渝るまじと契りし交り、わが訥辯にては言盡し難き程、相愛する中なれば、そこを思うて打明て云うて呉れよ、卿等は呼迎へられしならむどうぢや

ローゼ（ギルに向ひ）貴殿の御思召は

ハム　（傍白）それで少々讀めたわい——そのやうに隔てがましくせんてもよいわ

ギル　殿下、實は御召寄に預りましたのてムります

ハム　してその理由を云當てゝ見やうか、身が口より云つて了へば、卿等

に漏洩の罪はなく、兩陛下への秘密の約も破れはせぬ譯、さて身は近頃何故にや、たのしいといふ事少しもなく、あらゆる遊戯も廢して了ひ、何とはなしの悲さが深く性根に沁み渡り、此立派な世界も、身には荒果てたる野原と見え、此の美しい青天井、此の大氣、此大空、此の金色の星を象眼にしたる大屋根も、たゞ忌まはしき毒瓦斯の、籠れる處とより外思はれぬ程、又人間とは何たる造化の妙工、高き理性、無限の能力形態美しく、擧動正しく、行狀は天使の如く智惠は神の如しげに世界の花、動物の鑑とは人間の事、去りながら今の此身には此人間てふ土の精も果して何、男も、身を喜ばすに足らず、女とても同じ事、イヤ卿は笑ひ居るが同じ考と見ゆるわい

ローセ　イヤ左樣な考は少しもムりませぬ

ハム　然らば「男も身を喜ばすに足らず」と云ひし時、何故卿は笑はれしな

ローセ　それはかう考へたからてムります、只今道にて俳優の一座に出遇ました處、彼等は殿下へ御機嫌伺に參る途中との事てムりましたが、若し殿下が男をお嫌ひなさるなら、折角の彼等も嘸殘念な御待遇を、受る事てムりませう

ハム　イヤ俳優は格別、取分け國王に扮する者に、身は喝采の貢物を惜まぬ、又武者修業を演ずる者には、劍と楯との伎倆を振はせ、和事師には戀の口說を無報酬は演せぬ、不平役者には不平をたんと漏らさせう、滑稽役者には、おもいれ笑上戸を笑はせう、女形には際どい文句まで喋らせう、若し拔いたら白の襪が合ふまいぞ、して其俳優は如何なる一座てあるな

ローゼ　豫て殿下が御ひゐきになされました、京の悲劇俳優でムります

ハム　それが旅稼とはどういふ次第、京の座に居た方が、評判の爲めにも、利益の爲めにも宜からうに

ローゼ　それは此程の御改革で、京の興行を禁められましたのでムりませう

ハム　して彼等は、身が京に居し時と、同樣のひゐきを受け、同樣に騷がるゝかな

ローゼ　イヤ迚もさうは參りませぬ

ハム　して左樣になつた仔細は、彼等も墮落致したか

ローゼ　イヤ勉强は常の通りなれど、彼のキイ〳〵聲を振立てゝ、ヤンヤと受る小供芝居が大流行で、其座の作者は、從來の劇場をば、尋常の芝居

とさげすみ罵り、當世紳士は、何れもその禿筆に恐れをなし、覗いて見る者もムりませぬ

ハム　何、子供役者ぢや、後栖は何者ぢや、給料はどういふ風か、謠ふだけて仕舞は致さぬとか、果して然らば、彼等若し成人して、尋常の俳優となりし時、己れ等が後來の職業に、妄りに反對させられしよを、作者に向て怨むであらうが、ハテ成人して俳優を廢業す程、富祐な者はあるまいに

ローゼ　げに此の大小兩俳優の間には、激しき爭論がムりました、そして世間は平氣で此爭論を煽動てました、果ては一時此爭論を狂言に仕組み、作者と尋常の俳優とを問答せしめたる者ならでは、金儲にはならぬ程でムりました

ハム　左様の事があらうとは

ギル　ほんに激しい爭鬪がムりました

ハム　して子供俳優が勝利を得しとか

ローゼ　いかにも勝利を得ましてムります、地球を背負たハーキュレスさへ彼等の爲めに敗亡の躰にムります（譯者曰く、地球を負ふたハーキュレスは沙翁が出勤せし劇場「地球」座の看板なり、此邊當時倫敦の劇界をほのめかせし也）

ハム　想へばそれも不思議はない、父王陛下御存生中は、彼の叔父君を蔑にしたる者共も、今其叔父君が、丁抹王たるに及びては、其肖像の一枚に、二十三十、乃至百弗を擲つ世の中、イヤこれは學者の力にでも解き難い、何ぞ深い仔細があらう

と奥にて賑やかなる喇叭の聲

ギル　俳優共が參つたのでムりませう

ハム　イヤ卿等はようこそ此のエルシノーアへ參て呉れた、遲れ馳ながら握手を、かう禮義を守るも歓迎のしるし、且つ又かうしておかぬと、今俳優共を迎へるに、卿達よりも、彼等を鄭重に致す樣で心苦しい、ようこそ參て呉れた、とはいへわが叔父父、叔母母はまんまと欺され了せたな

ギル　それはまた何事にて

ハル　イヤサ、身はたゞ乾子の方塞がりと申す發狂で、南風の吹く時は鷹と鷲とを弁別へらるゝわ

とポロニス登場

ポロ　これは〳〵各方には御健勝で

ハム　コレ、ギルデンスタン、又ローゼンクランツも鳥渡耳をば貸して呉れよ、外てもないが、あの其處へ參つた大きな赤兒は、まだ襁褓をば離れぬと申す事

ローゼ　それは定めて二度目の襁褓てムりませう、老人は子供に返ると申しまする

ハム　身はあてゝ見せう、彼奴は屹度俳優の注進に來たのであらう――いかにも其通りぢや、月曜の朝にげに左樣であつた（譯者曰こはポロニアスの前を結ふ爲めの出鱈目と知るべし）

ポロ　殿下申上る事がムります

ハム　殿下申上ることがムります、羅馬の俳優ロッシアスが……

ポロ　その俳優共が參りましてムります、殿下

ハム　ヤイ〳〵

ポロ　イヤ誓文――

ハム　其時俳優は何れも驢馬にて來りけり（と小唄の一節を謠て居る）

ポロ　世に比類なき千兩役者、悲劇でも嬉劇でも、史劇、牧劇、牧的喜劇、史的牧劇、悲的史劇、悲歡史牧混淆劇、さては統一劇、不統一劇、何れも上手に致しまする、セヂカも悲し過ぎぬやう、ブロートタスも可笑し過ぎぬやうに致します、そして脚本を時と塲合てよう活かして使ふは、此一座に限りまする

ハム　おゝイスラエル國の大判事、デエプタとは卿が事、卿にはよい寶があるな

ポロ　寶とは如何なる寶てムりますな

ハム　ハテサ

一粒種のまな娘

又なきものにいつくしむ（ヂエプタ一人朗々と獨唱に供する旨の小唄の一節）

ポロ　（旁白）まだ某が女を忘られぬ

ハム　どうぢや此通りてあらう、喃老ヂエプタ

ポロ　某をヂエプタと仰せらるれば、如何にも某には、又なきものと愛む娘がムります

ハム　イヤさうではあるまい（それはわが誘ひし唄の意きにはばあらずとの意）

ポロ　然らば何とでムります

ハム　ハテ、

天か命か神ぞ知る

それから

かゝる事こそ起りけれ

あの小唄の一節を讀めば直ぐに分る、あれ見よ好い慰みが參りし故、

これて止めて置かう

と四五人の俳優登場

これはようこそ參られた太夫達、先づ皆な達者て嬉しいぞ、おゝ我が舊友達、ハテ汝は（一人の俳優に向ひて）久しく見ぬ内に、顏に髯が生えたが、身に對抗ふ積りて丁抹へは來りしな、おゝ汝は女形（女形の少年俳優に向ひ）いつぞや見た時は、高足駄を穿て、身長を高く見せて居たに、背丈が大分大きうなられた、これでは定めて近い中に聲變りが致すてあらうが、破れ目の入つた小判同樣、音が惡くなつて通用せぬやうにならねばよいが、

イヤ誰も彼もようこそ尋ねて呉れた、佛蘭西の腐匠ではないが、見かけた鳥は何なりと遁さぬ我等、いて今から早速聲色を聞きたいものぢや、一つ手際を見せて呉りやれ、サア〳〵何か情の深い臺詞を一つ

俳優甲　何の臺辭に致しませうか

ハム　身は汝が、一度聞かして呉れた事のある、臺辭を覺え居るが、それは一度も舞臺にかけられた事はない、よしありしにせよ、たつた一度で二度とはない、と申すは其脚本は、多數の見物が味つた事もない珍味にて、一般には受け悪しかりし故と思ふ、乍去身共並にかやうな事にかけては、身共よりもずつと鑑識の高い人々の考では、誠に良い脚本て、場面も整ひ、萬づ尋常に巧みに出來て居るげに誰やらむが評せし如く、別段甘い文句に甘い處のあるでもなけれど、わざとらしいといふ批難を受る詞もなく、謂はゞ正直ありのまゝの書振り、おもしろうて健全て、華美といふより優美といふ方、其中て身が殊に好いたは、エチアスがヂドーへの物語、取分けプリアム殺害の條を語る邊り、若し肥慮えて居るなら、一つかういふ文句の處から始めて呉れい、鳥渡待てよ、ウム

虎の如く猛きピルラス（トロイ戰爭の時の希臘方の勇士）は
いやかうでもない、何でもピルラスといふ文句て始める
あゝ、猛きピルラス――目的と共に黑き其の腕は、我も潜みし木馬の中の、闇にも似たるピルラスは、今や此の恐ろしく黑き肌を、いや恐ろしき朱に塗りて、全身只これ血の塊りの如し、あはれ幾多の父、幾多の母、幾多の子女の血もて塗られけむ其肌は、不忠にも主の殺戮に光りを貸して燃え落る街の熱さもて燒け凝りつ、さて激する心と、猛火に焦る身の廻り、凝血を塗れ

る悪魔の如きピルラスは、血眼になりて、彼の老王プリアム(トロイ國王)の
あるあらば、已れこそ、功名せむと求め廻りたり

サア、此後を續けて呉れよ

ガロ　これは殿下、天晴れ〳〵、御節廻しもよく、細かい處まで誠にもう

俳甲　間もなくプリアムに廻り合ひたりしに、折しも彼は今希臘兵に、一太刀浴
せかけたる處なりしが、劍は手の欲する所に從はず、空しく落ちて地を打
てば、又振上むとする所を、此方は血氣のピルラス、斬て懸るに、早り過て、太
刀は空を斬りたれど、太刀風に煽られて、老いたるプリアムはどうとばか
りに倒れ伏す、時にイリアム(トロイの首府)の市は非情なれども此老王が
最後を惜じたりけむ、燃ゆる家屋一時に倒れ、恐ろしき鳴動ピルラスが耳
を聾せしめ、今老王が白頭の上に振りかざしたる大太刀も、爲めにそのま
〻空中に留りて、恰ら、絵にかきし武者の如く、突立ちたるまゝ只茫然とな
し居たり、さはれ嵐の將さに起らむとするや、天鎧より靈動かず、風に聲な

く地はたゞ死せるが如くなる中に、やがて霹靂天をつん裂き來るなり、さ
ればピルラスは暫し我を忘れて立ちたる後、又俄に起り來れる復讐の念
に驅られて、再びおめきかゝる、あはれ鍛冶の神が、軍神の爲めに永劫不滅
の鎧を鍛ひし時、打ち下したる其鎚も、今ピルラスが血刀の、プリアムの頭
上を打つに比ぶれば物の情は知りたらむ、さるにても剛み難きは運命の
女神、あゝ八百萬の神達、願くは神集ひに集ひ神杳りに杳りて、彼女神が權
力を奪ひ、彼が車の輻と輪とを破り、覆は取て天上の丘より奈落の底迄も
轉ばし落してたび給へ

ガロ　これは餘り長過る

ハム　然らば卿の聟と共に床屋へ遣れ……先づ〳〵其の先を語て聞か
せい、此大臣に解るのは、おどけ歌や、たわれ節ばかりで、其外のを聞か
せると眠つて居らるゝ、サア〳〵先を、ヘクバの段を語つて聞かせい

俳甲　さはれ誰か見し頭巾眞深の女皇が——

ハム　何、「頭巾眞深の女皇」

ポロ　宜しうムります、「頭巾眞深」は宜しうムります

俳甲　徒歩のまゝ彼方此方と馳廻りつゝ、眼には烟なも消やすべき程の涙を注へ、遂昨日迄天冠を戴きし其頭には、一片の巾を纏ひ、衣服とては、驚き遇て起き出てし爲めにや、道が五十幾人の子を生みたる身躰とて、脊せ衰ひたる腰の廻りを、一枚の毛布にて包みしのみ、あはれ誰か此の有様を見たるもの、舌に毒して運命の神の不法を罵らざらむ、よしや神々なりとも、いとしの夫が、今ヒルラスのなぶりものとなりて、その五躰を切りさいなまれむとするを見たる、ヘクバの有様を目撃せば、人間の事物は悉く、神を動かすに足らずとならば知らず、さらずば其時惨し彼女が悲鳴は、燃ゆるが如き昊天の眼を涙に暈ませ、神々の憫みを惹起すことを得たりしならむ

ポロ　御覽あれ、皇子には、御顏色蒼然と、御眼に涙を浮べられしぞ、其方達、是にて止めて呉りやれ

ハム　宜しい、後は後に聞くと致さう――さてポロニアス殿、どうぞ俳優共を宜う待遇すやうに申付けられい、よう氣を付けて遣すが宜しからう、俳優と申すは生ける年代記のやうなものぢや程に、生ある中彼等より惡評を受るは、死して後厭な碑文をかゝるゝよりつらからうぞ

ポロ　殿下、人物に相當な取扱は屹度致しまする

ハム　何、いやもちつとよう取扱てやれ、人物に相當な待遇をせうならば人は皆擯らるゝ筈、されば却て亭主役たる、卿が名譽と威嚴とに相當するやうに待遇すがよい、さすれば其待遇が若し彼等に過るとも、それは卿が仁惠の大きい故、早う連れて行かれい

ポロ　皆の衆此方へ

ハム　ついて參て呉りやれ、明日は一幕見せて貰はうぞ

と俳優甲の外悉くポロについて退場

さて老友、ゴンザコ殺害の場を見たいが、出來やうか

俳甲　御意次第でムります

ハム　さらば明晩それを見やう、都合に由ては、十四行程の文句を、作つて挿入れやうと思ふのぢやが、それを演じては呉れまいか

俳甲　宜しうムります

ハム　左樣か、然らば早う、彼老臣について參れ、そして彼をば嘲弄致さぬ樣に注意致して呉れよ

おゝ卿達には、これより日沒まで休息めされい、ほんによう參て呉れ

と俳優甲退場

て嬉しいぞ

ローゼ　さらば殿下

ハム　安らかに休息あれ

とローゼンクランツ退場

ハム　さて今は四邊に人もなし、おゝ何たる腑甲斐なの此身、想へば此俳優が、たゞ空想の生みなせる、物語の情に激せられ、精神は空想に從て動きつゝ、顏青ざめ眼に涙、物狂ほしき面持、咽ぶ聲、さては一擧一動悉く、激する心を表はさぬものもなきは、不思議とも不思議ならずや、さてそれも皆な空想故、まつたヘクバ故にかくも泣き立るとは、そもそもヘクバが彼に何、彼がヘクバに何の緣故、素より何の緣故もなし、ましてあゝ、若し此俳優に、我が心中の此煩悶あらしめば如何なるべき、

舞臺中を涙て溢らし、恐ろしの臺詞は人の耳を裂き、罪ある者を狂せしめ、罪なき者をも恐れしめ、文盲人を惑はしめ、さてはあらゆる見物の、耳目を驚すことそも幾何、さるに我は痴愚魯鈍、而かも其王權と生命とを、簒奪せられし父王の爲めに、何の爲す事もなく、たゞ悄然と默し居るとは、あゝ我は何たる懦夫、人若し我を惡人と呼び、我が頭蓋を打破り、我が鬚髯をかきむしつて我が顏に投けつけ、我が鼻を引ねぢり、我を詐謀師と罵るとも、我は只默して之に從ふばかり、我は鳥類の鳩鴿と同樣、如何なる惡制侮辱をも、辛し口惜しと憤るべき、性根といふものなきならむ、さらずばなどて此今迄、此人非人の腐肉をもて、國中の惡鳥の腹を肥さて措くべきか、あゝ殘忍卑劣の惡漢、惡逆無道、淫肆、破倫の人非人、おゝ復讐、―イヤ、さるにても我は何たる鈍物、天は不

思議を現じ、地は亡靈を送りて、他迄復讐を勵まされつゝ此身ながら、人手に懸られし亡父を、たゞくよ〳〵と、女郎の腐つたのてもあるやうに、心の讐を漏しては、咀ひ罵るばかりなりとは、あな忌まはしや、何ぞよき思案もがな、――聞說く豫て罪惡を抱ける者、觀劇の最中に、その巧妙なる筋書に、いたく心を動かされ、即座に罪狀を懺悔したる事ありとか、げに殺人の罪に舌はあらねど、問ふに落ちず、語るに落るは世の習ひ、よし此上は彼の俳優共に、父王殺害の場を演ぜしめて叔父に見せ、其樣子を仔細に察し、心の底まで見すかし、其れむ、其時若し彼の叔父が、身じろぎなりとせうものなら、それこそ我が執るべき行動は明白我が見たる亡靈は、眞實は惡魔なるやも知れず、いかなる好もしき形にも見せるは、惡魔の常といへば、まして我等如き氣弱く心讐

せる者共は、尤も騙かされ易しと聞くものを、我を陷れむとの出現とも見らるべし、左なり、一層これよりも、確かな證據を得ては止まじ、劇こそは實に叔父王が、良心を試めす無上の道具なれ

と退場

第三幕

第一場　宮城内の一室

國王、皇后、ポロニアス、オフィリア、ローゼンクランツ、ギルデンスタン登場

國王　して卿等には、いかに遠廻しに探ても、何故彼のやうに懊惱と、さしも安穩に送らるべき日を、騒々しげに亂れ狂ひて、おもしろからず、過しぬるか、少しも手懸がつかぬとな

ローゼ　御自身にも常ならぬ心地するやう仰せらるれど、如何なる理由ありてとは、少しも仰せられませぬ

ギル　又探らうと致しても、少しも隙を見せ給はず、御兵相を御口走らせ

むと力めても、狂人の癖で、巧みにお外しなされます

皇名　卿等に對する素振は

ローゼ　至て御鄭重に入らせられました

ギル　たゞ御氣の進まぬを、強いてなさる樣てムりました

ローゼ　御談話は餘りなさりませぬが、此方から御尋ね致した事には、御快く御答ひ下されました

皇名　何ぞ氣晴しに遊技でも勸めては見なんだか

ローゼ　陛下、かやうてムります、我々兩人丁度途にて、俳優の一座に遇ひました事を、御耳に入ました處、かくと御聞きなされて、御喜びなされた御樣子、やがて俳優は參内致し、今頃は多分、今夜一幕御覽に入れよとの令旨を承りしことゝ存じまする

ポロ　その通りてムります、そして某へは兩陛下の御高覽を仰ぐやう、取斗ひ呉れよとの、御頼みでござりました

國王　それこそ望むところ、さう云ふ心になりしと聞て、朕も滿足、此上共卿達には、よう勸めて、かやうな保養に、氣の向くやうに引立て呉れよ

ローゼ　畏りました

とローゼ、ギル退場

國王　ガートルード、卿も彼方へ外してたもれ、偶然した事のやうに、こゝてオフイリアに遇はせむ爲め、今密とハムレットを喚びに遣はせし處、乃ち差障りのないポロニアスと、朕とたゞ二人、見附られぬやうに、此遭遇の模樣を隙見して、彼が擧動をとくと見屆け、果して叶はぬ戀の苦痛こそ、發狂の原因なるや否やをば判じて見やう

皇后　畏りました――喃オフィリア殿、そもじの美い容貌が、ハムレットが發狂の源なら、いかばかり此身は嬉しからう、若し左やうなら、操正しいそもじの心一つにて、再びもとのハムレットに復さむやうもあらうと申すもの、さてこそ、雙方の名を全うする道でもあらうわいの

オフ　妾もそのやうに致したうムります

と皇后退場

ポロ　然らばオフィリア、此方へ〳〵、そして陛下には何卒、此處に某と御一緒に――（オフに向ひ）此書物を讀んで居い、さすればいかにもそもじ一人で居るらしう見えやう程に――イヤ此のやうに粧ふといふ奴は、時々我等の犯す事で、誰も知り居る事ではあるが、信神らしい顏つき、尤らしい擧動で、心の惡魔をまんまと包み了うすとは

國王　（旁白）げにも其通り、その一言はわが良心に頂門の一針、醜顏を粧ふ賣女の紅粉も、惡行を粧ふ、わが口先に比ぶれば何のその、おゝ苦しの重荷や

ポロ　御足音が聞えまする、いざ陛下、此方へ〳〵

と國王、ポロニアス退場

ハムレット登場

ハム　定め難きは生死の分別、無情なる運命の責道具を、心にぢつと耐ゆるが立派か、海と狂ふ煩悶苦惱を、刃を以て終るはいかに、死とは何ぞ眠るに過ぎず、眠つたばかりて、心の惱み、其外肉に伴ふ、樣々の煩累を取去るとは、げに願うてもなき大往生、あゝ死とは眠、眠りて大方夢を見む、乍去おゝそこにこそ惑ひはあれ、此肉躰といふ殼を脱棄てた

後其死てふ眠の中に、如何なる夢を見るぞと思へば、誰しも暫し躊躇
く道理、長生の耻を忍ぶもたゞ是故、小刀一つて我から極樂が作れる
なら、誰が浮世の嘲罵鞭撻、王者の厭制、驕者の侮辱、成ぬ戀の苦み、國法
の緩漫、官吏の傲慢、さては溫順にして居れば、優者も劣者より受る排
斥などを、忍び〳〵てあるべきか、死後に何かは知らず、さる恐ろしき
ものゝあり、常世の國に旅立ちし旅人の、還た例もなければ、樣子分ら
ず、心も挫け、知らぬ處へ逝行て、どんな難儀に遇ふよりも、現在の苦艱
を忍ぶ氣にもなる、さらずば誰が生命といふ重荷を負うて、疲れた途
に呻吟からぞ、されば我等は良心の一願て怯懦となり、思案の首を低
るれば、折角の決心も青菜に鹽、大計畫もがらりと變り、實行されずに
殘るが習ひ——いや、默り居らう、靜かに〳〵、これは〳〵 オフイリア

殿

オフ　これは殿下、貴郎には此日來、如何遊ばされました

ハム　添ない、無事ぢや〳〵

オフ　妾はとくより御還し申さうと存じて居りましたが、此品は何時ぞ
や貴郎からの御贈品、どうぞ御納め下さりませ

ハム　イヤ受取れぬ、身は何一つ卿に贈りし覺えはない

オフ　確かに御贈り下された事は、御記憶の筈、そして其時、お優しいお詞
をまでお副え下され、それ故此品物も、一層貴とくムりましたが、今は
其色も香も失せ果てた此品、早や御納め下さりまし、贈り主の御心が、
冷やかになる上は、いかに立派な贈品でも、潔い心の者には、詰らぬも
のとなりまする、サアお納め下さりまし

ハム　ハ、ハー、そもじは操正しいな

オフ　何でムります

ハム　そもじは美しいな

オフ　何を仰せらるゝのでムります

ハム　操正しうて美しいなら、そもじの操は、そもじの美さと、友たることを肯んぜぬであらうと申すのぢや

オフ　美しさと申すものに、操よりもふさはしい友がムりませうか

ハム　それはあるの段ではない、美しさといふものが、操を化して淫に導くは易けれど、操が美しさを化して、高尚いものとなすは六つかしいとやら、從來はこれも解し難い謎であつたが、今では事實にあり〳〵ぢや、イヤ、身も其頃は、卿に戀を寄せたものぢや

オフ　ほんに殿下、妾もそのやうに信じて居りました

ハム　そのやうに信じたはそもじの過誤、ハテ德と申すものを我等人間の汚れた臺木へ接木にしても、どうもその臺木の臭氣は失せぬもの、我戀とてもその通り、潔白の戀ではなかりしぞよ

オフ　そんなら妾の考は、ほんに大間違てムりました

ハム　コレ、オフィリア、尼寺へ行かれい、そもじ故に、罪人を作るが本望でもあるまい、此身自らさへ、清く正しい身なれども、我ながら呆るゝ程の不德に充ち、寧そ生れて來なんだらと思ふ位、傲慢で復讐好で野心高く、其外思ふまい、想像すまい、行ふまいと思はるゝ不德は數知れず、身のやうなものが、此天地の間に這廻りながら何が成就やう、我等は皆な惡物ぢや、唯一人信じ得られう者はない、尼寺へ行かれい、父君は

何處に居らるゝな

オフ　館に居りましてムります

ハム　外處へ出て、たはけを盡さぬやうに、しかと閉籠めて置きめされい、

さらば

オフ　おゝ此君を救はせ給へ、神々

ハム　結婚などは致すてないぞ、若し何處ぞへ嫁がむなどゝ申すなら、身は祝儀として、此の呪詞を贈らうず、「縱令、氷の如く操正しく、雪の如く清かりとも、そもじは世の誹謗を免れ得ざらむ」――ハテ尼寺へ行かれい、さらばぞ――若し又强いてとならば癡漢の許へ嫁ぐかよい、知者は惑はずそもじ故に、角ある怪物（妻を盜まれたる夫の侮辱には角生ふるてふ俗説）とはなりたうもあるまい程に、ハテ尼寺へ行かれい、一刻も早う、さらば

オフ　おゝ神々、もとの我君に復させ給へ

ハム　汝等婦人は、顏に紅粉を粧ふさうな、神か賜ひし顏ばせを、別のものに仕直すさうな、身振り手振りに身を窶し、甘つたるい口をきゝては、物の名を呼違ひ、淫蕩を過失と云ひくるめる、止めよ身はもう我慢がならぬ、それ故にこそ此發狂、此後とも結婚といふは誰にもさせぬ、既に結婚なし居るものは、或一組（叔父王夫婦を指す）の外、許して置けど、あとは一切禁止ぢやぞよ、サゝ尼寺へ行きやれ

と退場

オフ　アノ氣高いお心が、このやうにもなればなるものか、大宮人の御眼付、博士の辯舌、武士の劍を兼備ひ、一國の希望たり花たる御身、風流の鑑賞好の模範、高人の則と仰ぎ見られし御方が、此の御有樣、あゝ女の

中の第一の不幸者は此妾、一度は此君が甘い優しい御詞の蜜を吸ひし身の、今は彼の氣高い優れたお心がすゝまやかなりし鈴の音の、音色俄かに變りし如く亂れそめ、若やかに似る者もなき御姿の花、御發狂の嵐に散行くを見るあはれ、おゝありし昔の君を見て、今の君を見る悲しさ

と國王ポロニアス再び登場

國王　何ぢや戀ぢや、イヤ彼が心は左樣な方へは向て居ぬ、又彼が詞を聞けば、少しく亂れては居れど、狂人のやうにもない、これは何ぞ彼が心の中に蟠りがあつて、それでかう憂鬱て居るのであらうが、その憂鬱の破裂には危險があらうぞ、その危險を防ぐ爲めに身は早速の決心をかう極めた、外てもないが、延引の貢物を催促の爲めと稱し、急ぎ英

國へ彼を遣さむ、彼が頭腦を惱ましそれ故にこそ、物にも狂はしむるなる、其の心中の蟠りも異つた海山の景色には、定めて消失する事てあらう、卿の意見は何とてあるな

ポロ　それは宜しうムりませう、去りながら愚考には、どうも殿下御憂愁のその起源は、叶はぬ戀からと思はれます——ヤア、オフイリア、ハムレット君の仰せられた事は、申すに及ばぬ、皆な承て居りしぞ——陛下、叡慮の通りに遊ばされて然るべう存じまするが、若しかう致しては如何でムります、瓢劇果てゝ後、母后御一人にて、御憂愁を御打明けなさるやう、靜に御すかしなされ、少しも隔てなう御懇談あるやう、御取斗ひ遊ばさるれば、茱は何處ぞに忍び、その御談話を拜聽致します、さてそれでも御打明なくば、英國へ御遣しになるか、さもなくば、叡

慮に叶はせらるゝ處へ、御禁錮遊ばされて宜しうムりませう

國王　然らばさやう致すてあらう、ともかくもやんごとなき者の狂亂は打棄てゝは置き難し

と二人退場

第二場　宮城内の書院

ハムレット及び俳優二三登場

ハム　科白はどうぞ、身が教へた通りに、すら〳〵と云廻して呉りやれ、若し汝達が、例のげう〳〵しい節て喋られるなら、寧そ廣告屋の人足を頼んだがまし、又手を以てかう餘り烈しく空を擲らぬやうに、何事も物靜かに、たとひ怒濤暴風、旋風と、情の狂ふ場合なりとも、抑へ〳〵て

靜に致すが却てよいもの、えて大向と申すは、大抵譯の分らぬ默劇か、騒擾場の外解せぬものぢやに、其の大向の耳を驚かしたい爲めばかりに、騒がしい聲をして、折角の演劇を臺なしにするのを聞くと、ほんに心底腹が立つ、惡も惡に過ぎ、魔も魔に過きては滑稽とならむ、かやうな奴は、散々打ちのめしてもやりたい程、ぢやに依て、かやうな事は避るやうに

俳優甲　心得まして、ムります

ハム　とはいへ、氣拔が致したやうてもならぬ、とくと己が胸に談合し、動作を科白に合せ、科白を動作に合せ、萬事程を過さぬやうにと心懸て貰いたい、程を過すと申すは、演劇の趣意に背くもの、そも演劇の趣意といつば、昔も今も謂はゞ自然のありのまゝを、鏡に映して見するが

専一、善悪好悪、各々其眞を寫し、時代世相の活きた姿を示すが義務さ
れば此事若し度を過し、或は足らざる處あれば、目の低い見物を喜ば
し得んも、目の高い見物を泣かしめむ、目の高い、たつた一人の評言は、
棧敷中の目低連の評判よりも、重いといふ事忘るゝな、ほんに世には
かういふ一座もある、その伎藝を身は見しが、耶蘇信者らしい科白も
所作もなく、いや異教者らしい、さては土臺人間らしい科白も所作も
なく、たゞ躍り廻り、たけり叫ぶばかり、いかゞはしい醫喩なれど、若し
や造化の翁が、人間を作る時、臨時傭の人足が、作り損ねたのではない
かと思はれるやうな、片輪の人間のみを見せながら、それで可なりの
大受とは

俳甲　手前共は左様の點は、大方改良致した積りてムります

ハム　おゝ悉く改良致すがよい、そして道化役には、割當てられた科白の
外は喋らぬやうに致し呉れい、彼等の中には、今演劇の筋が肝臂の處
と思ふ時など、委細構はず、たゞ低い見物を笑はせたい爲に、自分から
惡笑を致すものが往々あれど、これは實に憎むべきて、道化風情のは
かない野心と申すもの、イデ早う準備を致されい——

と俳優一同退場

ポロニアス、ローゼンクランツ、ギルデンスタン登場

これはポロニアス殿、陛下の御上覽は如何でムるな

ポロ　皇后陛下まで御上覽遊ばされます、そして直ぐ出御あらせられま
する

ハム　さらば俳優共に、急ぎ取掛るやうお傳へ下され

卿等も早う始むるやう、督促致し呉れい　とポロ退場

兩人　畏りました

ハム　ヤア〳〵ホレーシオ　とローゼ、ギル退場

ホレ　殿下、御前に　とホレーシオ登場

ハム　ホレーシオ、身が知人も多い中で、げに頼もしいは卿一人

ホレ　これはしたり、殿下——

ハム　イヤ媚言を申すと思ふな、食ふにも衣るにも、一文の實收もない、あるものは善い氣前ばかりの、卿に媚らうて何の希望、貧者が媚らはるべき理由もない筈、甘つたるい追從は、富貴に誇る愚者に吐け、軟かな膝節は、會釋に報酬のありさうな處へ折れ、どうぢや判つたか、身が精神は我儘者で、人の毛並を見て好嫌を致すが、甚う卿か氣に入つた、その譯は、卿がいかやうな難儀を受ても、少しも受ぬ樣な容子を爲し、苦樂共に運命の指揮を、おとなしく引受る故、ほんに卿のやうな、智と情と程よく和合し、運命の指の抑へ加減で樣々な音を出す、笛の樣でない身は何たる幸福、誰にてもあれ、苟も情の奴隷ならぬ者があらば、身は卿同樣、其者を胸の中の奥深い處へ、思ひ籠めて、慕ひもし崇めもせう——イヤ是は思はぬ雜言——何はさて措き、今夜演劇を天覽に供する筈なれど、其中の一幕は、卿にも告げし事ある、父王崩御の次弟に似て居る程に、何卒その幕が開いたなら、卿が燃犀の活眼をもて、叔父

王の素振を見屆て呉りやれ、科白の中の一節には、彼若し秘密の大罪を抱けるなら、平然としてはえ聞くまじき文言あり、さるも尙ほ平然としてあらば、彼の亡靈こそは、我を欺きし魔性のもの、身が推量もワルカン(神鍛冶)の鍛冶場、亂れたりと申すもの、氣をつけて見て呉りやれ身も叔父が顏をば眼離さず見詰め居て、後に二人が所見を比べ合せ、我等が考を極めやうぞ

ホレ　心得ました、若し演戲中何なりと、陛下の素振を見逃すやうな事あらば、如何やうな目にでも御逢はせなさりませ

ハム　さういふ中に、はや參りし樣子、身は何げなき顏を致して居らう、卿は善い席を取て置けよ

と丁抹進行曲、賑かな喇叭の音の中に、國王、皇后、ポロニアス、オフィリア、ローゼンクランツ、ギルデンスタン、其他侍從職大勢、衛兵、燭火を携へ登場

國王　いかにハムレット、容態は如何ぢやな

ハム　鹽梅は誠に結構、カメレオンの馳走と申すもの、パテ、カメレオンと申す虫は、空氣を常食と致すとの事、それがしも空氣に等しき、空約束の馳走ばかり、乍去家禽をお伺ひ遊ばすには、此餌では御用に立ちますまい

國王　これは妙な挨拶、聯には受取れぬ返答

ハム　それがしとても、一旦云放ちしもの故、再び引取る譯には參りませぬ——(ポロに向ひ)ポロニアス殿、卿は大學の演劇(譯者曰く、英國の大學にてはクリスマスの節學生集りて拉典語の演劇をなす習慣ありしとぞ)に、加りしとありと聞きしが

ポロ　いかにも加りました事がムります、そして名優の中に數へられま